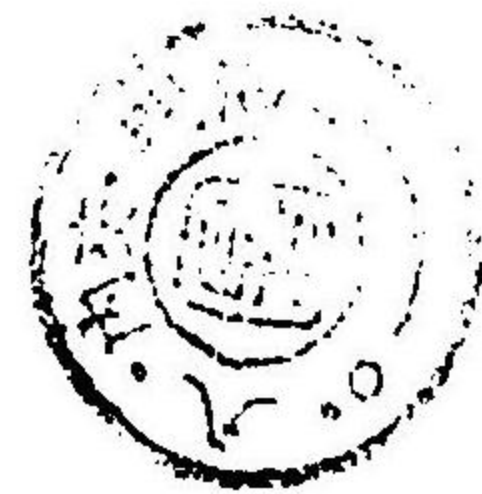


文學士佐々政一著



日本文學史要

全

東京 内外出版協會



## 日本文學史要

### 緒言

一、此書は、著者が第二高等學校に在りて、日本文學史を教授する傍略、文部省の國語科教授細目に準憑して、其大要を摘記し、中等教育の教科書となさんとしたるものなり。

一、從來此種の著書二三ありと雖も、或は雅文、雅歌等に煩にして、近古の時代文學に簡なるもの、或は文學全體の時代的變遷に専らにして、其部分的變遷、即ち各種の文體の變遷を遺却したるに似たり。故に著者の最も注意せしは、此點を補はんとするに在りき。されど、かの細目に規定したる、僅々十時の間に、完全なる文學史を教授せんことは、望み得べきことに非ざれば、私意を以て、ことさらに取捨



せる所時に輕重大小を失したることなきを保せず。乃ち卷尾に、文體の變遷及び時代文學の大要を表示して、教師が書中の某項を省略し、或は某節を敷衍することあるも、全體の變遷を達觀せしむることに於て、妨げなからんことを期す。

一、書中の實例は、参考の爲めに引用したるものとす。故に生徒が既に習得せる教科書中に、適當なるものを指摘し得ば、これを省略し、若くは讀書科の時間に譲られんことを期す。然すれば、本書の全體を十時間内に教授すること、甚だ困難ならざるべしと信す。

一、書中に用ゐたる文學上の名稱は、専ら在來慣用せるところに従はんとしたれども、律語といふ一語のみは、已むを得ずしてこれを用ゐたり。此語は、獨語のゲブンデネ、レーデを翻譯したるものにして、散文に反對せる語なること、書中に説くが如し。先輩中、既に此語

を用ゐたるものも尠からず、分類上、又極めて明確なる語なれば、韻文、歌等の如き不穩當なる語を墨守せんよりは、大に便利なるべし。ことに從來の文學史家が、謠曲、淨瑠璃等の類を、散文中に加へて恠まざりしが如きは、韻文又は歌などといふ語の意義の漠然たりしに由るところ多きに似たり、これ著者が、敢て此一新語を採用せし所以なり。

仙臺に於て

著者識

明治三十一年初秋



日本文學史要

目次

序論	一
第一章 奈良朝以前	五
日本文學の起源	五
奈良朝以前の文學	九
第二章 奈良朝	一三
總説	一三
律語	一五
散文	二一
第三章 平安朝	二五



總説	二五
律語	二七
散文	三四
第四章 鎌倉時代	五一
總説	五一
律語	五二
散文	五七
第五章 室町時代	七一
總説	七一
律語	七二
散文	八〇
第六章 江戸時代	九三

附

總説	九三
律語	九五
文體變遷の畧表	
時代文學畧表	



# 日本文學史要

文學士 佐々政一 著

序論

日本文學史とは、日本文學の起源、發達、變遷を叙する歴史なり。而して、日本文學とは、日本人が、自國の言語を以て、自己の思想、感情、想像等を叙したる記載物をいふ。

抑、一國文學の特質は、其國民の特性に起因し、其特性の發達、國家の治亂、外國思想の感化等に由りて、發達變遷するものにして、我が天壤無窮の帝室を戴き、秀麗なる富嶽、琵琶湖の靈氣に養はれたる、忠勇にして優美なる日本國民が、上下三千年の治亂と、漢學思想、佛教思



想等の感化とに由りて、如何なる文學上の發達變遷を爲し、かは、頗る興味ある問題にして、又國民の知らざるべからざるところなり。

文學は、其言語配列の方法によりて、大別して二種となすことを得。律語及び散文これなり。

律語とは、言語配列の方法に、特別なる規律ある文學にして、日本文學に於ては、一句中の音數を一定にするを常とす。長歌、短歌、俗謠、發句等の類これなり。

散文とは、これに反して、言語配列の方法に、特別なる規律なき文學にして、我國の物語、小説、草紙、隨筆等の類皆これに屬す。

律語と散文とは、互に相影響して發達するが故に、まゝ兩者を混じたる文學あり。上古に在りては、散文と稱すべきものにして、記誦に

便ならんが爲めに、律語に近き形をなせる古事記の類あり。後世に至りては、律語中に散文を交へたる謠曲、淨瑠璃等あり。



## 第一章 奈良朝以前

### 日本文學の起源

文學は記載物なるが故に、其起源は、必ずや、文字の起源の後に在らざるべからず、されば漢文字の渡來以前に、既に我國固有の文字有りしや否やは、日本文學の起源を知らんとする者の、先づ知らざるべからざる所なり。

蓋、我國は、神代より朝鮮との交通あり、衣食住より諸種の技術に至るまで、頗る開化せりしこと、國史に見ゆれば、朝鮮の諺文、其他形象文字の如きものが、早く社會の一部に行はれしなるべけれど、未だ一般の社會に流布するに至らず、未だ見るに足るべき文學を作るに至らざるに先つて、更に進歩したる漢文字輸入せられて、在來の



文字は、全く湮滅するに至りしなるべし。  
 されば、漢文字渡來以前には、未だ完全なる文學と稱すべきものなかりき。されど、我國には夙に口授の法行はれて、家々の耆老は、時々子孫を集めて、大にして一國、小にしては一家の舊事を口授し、又語部と稱する一部族ありて、専ら國家の舊事を口授相傳すること業とせりしかば、太古に於る、諸般の歴史上の事跡より、歌謠の類に至るまで、相傳へて忘れざりき。後世漢文字を以て、其口碑を記載したるものを、古事記、風土記、氏文等とす。これ等の書は、多く漢文を混じたれば、太古の語法を失ひし所尠ならず。日本書紀も亦口碑を記したるものなれども、専ら漢文を用ゐたれば、歌謠以外には、上古の語法を見ること能はず。左に二三の歌謠と、風土記の一節とを記して、日本文學の萌芽を示さん。

素盞之男尊、櫛名田姫を娶りて、須賀の宮を造り給ひし時、雲の立ち上るを見てよみ給へる歌。

八雲九つ、出雲八重垣、妻ごめに、八重垣造る。其八重垣を。

道臣命、神武天皇東征の時、忍坂邑にてよめる歌。

忍坂の、大室屋に。人さには、來入り居り。人さには、來入り居りども、みつみつし、來目の子等が、頭搥い、石搥い、持ち、擊ちてしやまん。

日本武尊、東征凱旋の途次、酒折の宮にて、侍臣に宣給へる歌。

にひばり、筑波を過ぎて、幾夜か寝つる。

侍臣答へ奉れる歌。

かゝなへて、夜には九夜。日には十日を。

此時代の歌は、總て五七數節の後に七の句を置きたるものにして、其五七二節なるを短歌と云ふ。素盞之男尊の歌これなり。此歌は又歌の史に見ゆたる始なり。其二節以上なるを長歌と云ふ。道臣命の歌これなり。而して又稀に其一節なるものあり。日本武尊及び其侍



臣の歌これなり。この問答の體は、後に少しく變化して連歌となりぬ、故に世人、或はこれを以て連歌の始となす。

出雲風土記、國引の段の一節

國引させせる八束臣津野命詔り給はく、八雲立つ出雲の國は、狹布の稚國なるかも、初國こさ小く作らせり、故作り縫はな、と詔り給ひて、栲衾新羅の崎みやまを、國の餘り、餘り有りやと見れば、國の餘り有り、と詔り給ひて、童女の智すき取らして、大魚のきだつき別けて、はたすゝきはふり別けて、みつみの綱うちかけて、しもくる葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來とひき來て縫へる國は、こづより打ち絶ちて、やはよねきづきの崎なり。

此一節の如きは、上古の言語をさながら傳へたるものなるべし。記誦に便ならんが爲めに、頗る律語に似たる體を成せるは其特色なり。

總て此時代の歌謠及び口碑は、純朴なる上古の風俗の反照として、自然にして毫も鏤刻を用るざる間に、眞率なる雅音あり。

奈良朝以前の文學

紀元九百年代應神天皇の御代に、朝鮮の使者阿直岐及び博士王仁來りて、皇子稚耶子に經書を教へ奉りき。これ漢文字の我國の朝廷に傳はりし始なり。この以前にも、私に漢文字を學びし者ありけれども、未だ一般に流布するに至らざりき。されば我國に完全なる文字あるは、此時に生まれりと云ふべく、純然たる文學も、亦此時に生まれりと云ふべし。其後阿直岐、王仁の子孫、其他許多の朝鮮人、支那人來化して、文藝及び工藝に従事せしかば、漢文字、漢學思想は、其風俗とともに、漸く傳播して、彼の文字の音訓を假りて、國語を記すること亦從つて始まりぬ。この間に、嘗て支那、朝鮮に傳はれりし印度の佛教も、亦我國に傳はりぬ。紀元千二百年代欽明天皇の時、蘇我馬子



之を祀るに至つて、佛教始めて盛なり。佛教思想此に於て又我國に入る。

此の漢學思想と佛教思想との傳播は、終に紀元千三百年代孝德天皇の御代に於る大化の新制を導きぬ。然れども、此の時代は未だ模倣の時代にして、此等の思想は未だ日本固有の思想と調和するに至らず、其文學は依然たる上古の思想にして、唯自然なる發達の爲めに、少しく其巧緻を増進せるのみ。次に載せたるは、此の時代の歌謠と欽明天皇の頃に成れる祝詞となり。

天智天皇春山の萬花の艶と、秋山の千葉の彩と、いづれかまされる、と問ひ給ひしとき、額田王の答へ奉れる歌。

冬木も、春さり來れば、鳴かざりし、鳥も來鳴さぬ、咲かざりし、花も咲けれど、山をしみ入りても取らず、草深かみ、手折りても見ず、秋山の、木の葉を見ては、黄葉をば、取てぞしぬ、青きをば、置きてぞなげく、そこしうらめし、秋山われは。

磐姫皇后、天皇を思はしめしてよみ給へる歌。

ありつゝも、君をばまたん、うちなびく、わが黒髮に、霜の置くまで。

出雲國造神賀詞の一節

高天の神王、高御魂神御魂の命、皇御孫之命に、天の下大八島國を事依さしまつらし、時に、出雲の臣等が遠祖、天の穗日の命を國體見に遣し、時に、天の八重雲を押かけて、天翔り國翔りて、天の下を見廻りて、返事申したまはく、豊葦原の水穂の國は、晝は五月蠅なす水沸き、夜は火釜の如くかゝやく神あり、石根、木立、青水沫も事問ひて荒振國なり、然れども鎮めむけて、皇孫之命に安國と平らけく知しめさしめむと申して、己の命の兒、天夷鳥命に布都怒志命を副へて、天降し遣して、荒ふる神どもを撥ひ平らげ、國作らし、大神をも媚ひ鎮めて、大八島國現事順事々さらしめき、乃ち大穴持命の申し給はく、皇御孫之命の靜まりまさむ、大倭の國と申して、己の命の和魂を、八咫鏡に取つけて、倭の大物主櫛玉命と御名を稱へて、大御和の神なびにませ、己の命の御子、阿遲須伎高孫根命の御魂を、宇奈提にませ、賀夜奈流美命の御魂を、飛鳥の神奈備にませて、皇御孫之命の近き守神とたてまつり置きて、八百丹杵築宮に靜りましき、こゝに親神魯伎神魯美命の宣りたまはく、汝天の穗日の命は、天皇命



の手長の大御世を、堅磐に常磐にいはひまつり、いかしの御世に幸へまつれど、仰せ給ひし次でのまにまに、いはひごと仕へまつりて、朝日の豊榮登に、神のゐやじり、臣のゐやじりと、御座の神寶獻らくとまをす。

## 第二章 奈良朝

### 總説

文學史上の奈良朝は、政治史上の奈良朝と少く異なりて、紀元千三百年代持統天皇の頃より、千四百年代桓武天皇の都を京都に遷し玉ひし頃までの時代を云ふ。此時代は彼の模倣の文化が一たひ其絶頂に達したる時代にして、支那との交通彌々頻繁に、遣唐使留學生益々多く、又前時代の末に起こりたる大學國學は、盛んに漢學者を養成せしかば、漢文漢詩大に流行し、元明天皇の御代には、日本書紀と稱する漢文の國史成り、孝謙天皇の御代には、懷風藻と稱する漢詩集成るに至りぬ。かく漢文學の流行するにつれて、漢字を以て國語を記すること益々自在となり、古事記、風土記、氏文、祝詞、宣命



の類も記載せられ、萬葉集も成りぬ。

古事記、風土記、氏文の文は、純粹なる漢文と、漢字を以て國語を記したるものとの混合文にして、行幸於伊勢、轉入東國といふが如き漢文と、万介太麻波、天平佐女太麻波、幸といふが如き國文とを混じたり。

然るに祝詞、宣命は所謂宣命書、萬葉集は所謂萬葉書にして、ともに漢字の音訓を假りて國語を記したる、純粹なる國文なり、即ち

天神乃壽詞遠稱辭定奉良久申須宣命書

山越乃風乎時自見寐夜不落家在妹乎懸而小竹櫃萬葉書

宣命書は、てにをはの類を細字に記したるものにして、蓋し一段進歩したるものなり。

此等の記載法更に進歩して、片假名起こりぬ。片假名は漢字の點畫

を省略したるものにして、當初は唯屢用るる文字の點畫を省略せるのみなりしを、省略の法漸次發達して、此時代の終りに至りては、五十音を完成するに至りぬ。而して所謂五十音圖を完成したるは吉備眞備なり。

佛教亦此時代に至つて彌盛なりしかば、文學上にも無常寂滅の思想、稍あらはれたり。されど其思想が、日本思想と眞に調和したるは、次の時代なり。

律語

奈良朝の律語の粹は、萬葉集に盡きたり。此集の撰者及び集撰の時代は、詳かならぬと、或は曰く、此時代の末葉の歌人大伴家持の撰なりと。集中、紀元九百年代、仁徳天皇の御代以來の古歌をも載せられたる、其大部分は、此時代の歌にして、上は天皇の御製より、下は役民の



歌、東北地方の賤民の歌、乞食者の詠をさへ集められたれば、以て社會全般の好尚を窺ふべく、又以て社會一般に、歌を嗜みしことを知るべし。かく諸種の方面の歌謠を収めたれば、まゝ拙劣なるものなきに非ずと雖も、其高妙なるものは、雄渾壯大の致、平安朝以後の歌謠に、絶て其匹儔を見ざるもの多し。

集中の歌數は、短歌四千七百七十三首、長歌二百六十二首、旋頭歌六十一首にして、別に連歌一首あり。短歌長歌は既に説明しぬ。旋頭歌とは、短歌の第二句と第三句との間に、七音の句一句を加へたるもの。連歌とは、短歌の初三句と終二句とを分かち、二人にて詠じたるものにして、此の集に見ゆる一首の連歌は、純然たる連歌の始なり。柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、大伴家持等、當代の歌人の有名なる者は、皆長歌に巧なりき。これ等の歌人の中にも、人麿赤人の

二人は最も秀で、歌聖の稱あり。人麿は持統文武の兩朝に仕へ、赤人は聖武の朝に仕へし人にして、ともに其官職詳らかならずと雖も、高位高官に至りし人には非ず。憶良は頗る漢文に通ず、一たび遣唐使となり、後聖武の朝に筑前守に任せらる。旅人は有名なる武門の名族に出で、聖武の朝に、大納言に至りき。家持は其子なり、中納言征東將軍に任せらる。萬葉集の選者と稱せらるゝは實に此人なり、父子の詠ともに慷慨の氣に富めり。

近江の荒都を過ぎし時、柿本人麿のよめる歌。

たまたすき、畝傍の山の、榎原の、聖の御世ゆ、生れまし、神のことく、つがの木の、いや  
や織ぎく、に、天の下、しろしめし、を、空に見つ、大和を置きて、背によし、奈良山を越  
ぬ、いかさまに、思はしめせか、天さかる、鄙にはあれと、いはし、の、近江の國の、さゝ浪  
の、大津の宮に、天の下、しろしめしけん、天皇の、神の命の、大宮は、こゝと開けとも、大殿  
は、こゝと云へとも、春草の、茂く生ひたる、霞立つ、春日の、さされる、百しきの、大宮をこゝろ、



見ればかなしも。

反歌

さ、浪の、滋賀の唐崎、さきくあれど、大宮人の、船まぢかねつ。  
さ、浪の、滋賀の大わだ、よどむとむ昔の人に、またも逢はめやも。

不盡山を望みて、山邊赤人のよめる歌。

天地の、別れし時ゆ、神さびて、高く貴き、駿河なる、富士の高根を、天の原、ふりさけ見れば、わたる日の、かげもかくるひ、照る月の、光も見ぬす、白雲も、い行きは、かり、時じくそ、雪はふりける、語りつき、いひつき行かん、富士の高根は。

反歌

田子の浦ゆ、うち出で、見れば、ま白にぞ、富士の高根に、雪はふりける。

感情を反せしむる歌

山上 憶良

或は人あり、父母を敬するを知らず、侍養を忘れ、妻子を顧みずして、脱履より輕し、自畏俗先生と稱す、意氣青雲の上に揚ると雖も、身體猶塵俗の中におり。未だ修業得道の聖に驗わらず、蓋は山澤亡命の民なり、所以に三綱を指示し、更に五教を誦き、之に遺くるに歌を以して、其惑を反せしむ、歌に曰く、

父母と見れば尊し、めこ見れば、めくしうつくし、世の中はかくぞことわり、もちどりの、かゝらはしもよ、ゆくへ知らねば、うけぐつを、ぬぎつる如く、履みぬぎて、往くちよ人は、岩木より、なりてし人かな、ながなのらさね、天へ往かば、汝がまに、地ならば、大王います、この照す、日月の下は、天雲の、ひかぶす際み、たに、の、さわたる際み、聞こし食す、國のまほらぞ、かにかくに、欲しきまに、しかにはあらじか。

反歌

久方の、おまちは遠し、なほ、いへにかへりて、なりをしまさに。

喻族歌

大伴 家持

久方の、天の戸開き、高千穂の、嶽にあもりし、すめらぎの、神の御世より、櫛弓を、手握り持たし、眞鹿矢を手挟みそへて、大久米の、益荒丈夫を、前に立て、鞆どり負はせ、山河を、岩根さくみて、踏みどほり、國まぎしつ、千早振、神をこどひけ、まつろはぬ、人をもやはし、はき清め、仕へまつりて、蜻蛉洲、大倭の國の、榎原の、畝火の宮に、宮柱、ふとしり立て、天の下、しろしめしける、天皇の、天つ日嗣を、つぎてくる、君の御代々々、かくさはぬ、赤き心を、すめらへに、さはめつくして、仕へくる、祖のつかさど、ことたて、授け給へる、生の子の、いや織ぎ、見る人の、語りつぎて、聞く人の、鏡にせんを、あたら



しき清きその名ぞ、れはろかには、心思ひて、むなごとも、祖の名たつな、大伴の氏と名に  
たへる、ますらをのとも。

反歌

敷島の、大倭の國に、明らけく、名にたふとも、をこころつとめよ。  
劍太刀、いよ、磨ぐべし、いにしへゆ、さやけくれひて、來にしその名ぞ。

梅花の歌

大伴旅人

わが園に、梅の花ちる、久方の、天より雪の、流れくるかも。

香椎浦にてよめる歌

同

いざこども、香椎の海に、白妙の、袖さへぬれて、朝菜つみてん。

伊香山にてよめる歌

笠

金村

草枕旅行く人も、行きふれば、にはひぬべくも、咲ける萩かも。

いかこ山、野邊に咲きたる、萩見れば、君が家なる、尾花したもはゆ。

旋頭歌

君がため、手力つかれ、織りたる衣を、春さらば、いかなる色に、すりてばよけん。

連歌

佐保川に、水をせきわけて、植ゑし田を、  
蒔る早飯は、ひとりなるべし。

尼

家持

散文

此時代の散文の重なるものは、祝詞と宣命となり。祝詞は、神明に奏  
する詞にして、宣命は君命を下に傳ふる文章なり。上古の語を以て  
文をなす、皆謹嚴典雅、就中前時代に成りたる出雲國造神賀の詞、此  
時代の大祓の詞等は、祝詞中の有名なるものにして、宣命は、續日本  
記中に見ゆたるもの皆誦すべし。

古事記は、元明天皇の朝に、太安麿が、稗田阿禮の口授を筆記したる  
ものにして、我國最古の歴史として、又國文界の至寶なれど、其文章  
は、前時代より既に言語の上に成立せりしものなれば、直ちに此時  
代の文學とは稱し難きに似たり。風土記は、諸國の風土舊事を記す



たるもの、氏文は家々の祖先の事跡を記したるものにして、ともに此時代に至つて記載せられたり。左に宣命一篇を載せて、當代散文の一斑を知らしむ。

光仁天皇寶龜二年二月の詔 (續日本記)

藤原左大臣に詔り給ふ大命を宣る。大命にませ詔り給はく、大臣明日は參出來仕へむと待ひ給ふ間に、休まりて參出ます事はなくして、天皇が朝廷を置きて罷りいまずと聞し食して、おもはさくおよづれかも、たはごどをかも云ふ、信にしあらば、仕へまつりし太政官の政をば、誰に依さしかも罷りいまず、孰に授けかも罷りいまず、恨めしかも、悲しかも、朕が大臣、誰にかも我が語ひさけむ、孰にかも我問ひさけむ、と悔しみ、惜らしみ、痛み、悲しみ、大御泣哭かしますと詔り給ふ大命を宣る。悔しかも、惜らしかも、今日よりは、大臣のまをし、政は、開しめさずやならむ、明日よりは、大臣の仕へまつりし儀は、見そなはさずやならむ、日月累り行くまに、悲しき事のみし、彌起るべきかも、歳時積り行くまに、さぶしき事のみし、いよ、まさるべきかも、朕が大臣、春秋の麗しき色をば、誰と共にかも、見そなはし弄びたまはむ。

山川の清きところをば、孰と共にかも、見そなはしあからへ賜はむと、歎き給ひ、憂ひ給ひ、大ましますと詔り給ふ大命を宣る。汝大臣の、萬の政ふさねもちて、怠り緩む事なく、まげ傾くる事なく、王等、臣等をも、彼是別く心なく、普く平らけく奏さひ、公民の上をも、廣く厚く慈みて、奏ひし事、これのみにあらず、天皇が朝廷を、暫くの間も、罷り出で、休もふ事なく、食國の政の善くあるべき狀、天の下の公民の休まるべき事を、且夕夜日と云はず、思ひ議り奏ひ、仕へまつれば、いそしみ、明らけみ、おだひしみ、たのもしみ、思はしつゝ、大まします間に、忽ちに朕が朝廷を、さがりて罷りましぬれば、言はむ術もなく、爲むすべもしらに、悔し給ひ、わび給ひ、大ましますと詔りたまふ大命を宣る。

又事別て詔りたまはく、仕へまつりしこと廣み、厚み、汝大臣の家内の子をも、はより給はず、失ひ給はず、慈みたまはむ、起したまはむ、たづねたまはむ、かへり見たまはん、汝大臣の罷道も、うしろかるく、心もおだひに思ひて、平らけく、幸く、罷りとほらすべしと、詔りたまふ大命を宣る。



### 第三章 平安朝

#### 總説

紀元千四百年代桓武天皇平安遷都の時より、千八百年代鎌倉覇府創立の時まで、即ち藤原時代、平家時代を通じて平安朝と云ふ。漢學、佛教の流行は、奈良朝の後を承けて、なほ駸々として進みしかば、此等の思想が我が固有の思想と調和するとともに、古來の尙武の風は漸く消磨して、浮華驕奢の風大に起こり、文學も亦従つて艶麗纖巧の美に長じ、雄壯なる奈良朝の風姿、殆んど見るべからず、且つ文字の事は總て貴族社會の專有に歸して、奈良朝の如き、四民の文學を見る能はざるものを、此時代の文學の大觀とす。

奈良朝の末に、片假名の發明あり、此時代の始には、平假名の發明あ



り。平假名は、漢字の草體より起こりしものにして、僧空海が「いろは歌」を作るに至りて完成しぬ。かく二種の完全なる假名文字成りて、國語を記すること、大に便利なるに至りしかば、學者は尙漢學に心酔して、漢詩漢文のみに專なること久しかりき。然るに紀元千五百年代醍醐天皇の頃より、遣唐使廢せられて、漢學稍衰色あるに乘じ、紀貫之以下の國文學者輩出せしかば、和歌には勅選集起こり、國文には物語、草紙、日記、紀行の類盛に行はれき。されど漢文も亦全く衰ふるに至らず。要するに此時代は、國文、漢文ともに盛なりし世なり。されば漢文の著書には、歴史に、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄の五書あり。これに日本紀を加へて六國史と云ふ。歴史家の至寶なり。詩文集に經國等<sup>集</sup>本朝文粹等あり。詩歌を合輯したるものに和漢朗詠集あり。ともに當代以後の文學者の愛讀せるもの

のにして後世の國文學に影響せること尠なからず。

律語

我が上古の歌は、盡く謠ふものなりしを、奈良朝の末より、記載の法自由となりて、謠はざる歌を生じ、此時代に至りては、歌は謠はざるものとなり了りて、これとともに、長歌は殆んど滅しぬ。而して長短歌に代りて、謠はれしものを、催馬樂、今樣等とす。

一、歌。此時の歌は殆んど短歌のみなること既に云ふが如し。それは一般人情の趨勢に従ひて、優美に偏長せしのみならず。題詠漸く行はれて、専ら巧を言語の末に争はんとする傾向をさへ生じたり。故に雄渾壯大なるものに乏しと雖も、其措辭の巧妙なる、其聲調の優美なることは、遠く奈良朝の右に在り。奈良朝の末より、詩賦の流行に壓せられて、歌は久しく振はざりし



が、醍醐天皇の時、紀貫之等勅を奉じて、萬葉以後の歌を集めて古今集を撰す、これ勅撰集の始なり。これより和歌大に勃興して、次で村上天皇の時、源順等後撰集を撰び、花山天皇拾遺集を撰び給ふ、以上を三代集と云ふ。就中古今集最も優れたり。其後又後拾遺、金葉、詞華、千載の四勅撰あり。

此時代の歌人の有名なるものを、在原業平、小野小町、紀貫之、凡河内躬恒、源順、藤原公任、源俊賴、藤原基俊、藤原俊成等とす。業平、貫之、俊成最も傳ふべし。

業平は桓武天皇の孫なり、時宛も藤氏專横の世にして、落魄志を得ず、去つて風月の間に自放す。歌は其最も長ずるところにして、又伊勢物語の著あり。貫之は歌人望行の子にして、碩學長谷雄の孫なり。土佐守を経て木工頭御書所預に任せられ、古今集の撰者たり。土佐

日記、古今集の序等の名文あれども、歌人として最も著名なり、後人赤人、人麿に次ぐものとなす。俊成は御堂關白道長四世の孫にして、皇太后宮大夫に任せられ、千載集を撰す。後鳥羽天皇就て歌を學び玉ひしかば、終に和歌所の所領を其家に賜ひ、子孫相襲ぎて歌を以て朝廷に仕ふ、後世の所謂師範家の祖なり。

清の院にて櫻を見てよめる

在原業平

世の中に、たねて櫻の、なかりせば、春の心は、のどけからまし。

妻の妹をもて侍りける人に、うへの衣を

贈るとて、

全

紫の色濃きときは、めもはるに、野なる草木ぞ、わかれざりける。

長谷に調づる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程へて後至りければ、かの家の主、かくさだかになん宿は、ある、といひ出して侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる。

紀貫之

人はいざ、心も知らず、故郷は、花ぞ昔の、香に匂ひける。



陸奥へ罷りける人に、よみて遣しける。

全

白雲の、八重にかさなるを、ちにても思はん人に、心へたつな。

世の中のはかなきことを思ひける折に、

菊花を見てよめる。

全

秋の菊、匂ふかざりは、かざしてん。花よりさきと知らぬわが身を。

雪のふりけるを

全

霞たち、木の芽もはるの、雪ふれば、花なき里に、花ぞちりける。

櫻のちるをよめる

凡河内躬恒

雪とのみ、ちるだにあるを、櫻花、いかに散れどか、風の吹くらん。

時鳥の鳴けるを聞きてよめる

全

時鳥、我どはなしに、卯の花の、うきよの中に、鳴き渡るらん。

雷の坪に、人々集まりて、秋の夜を惜しむ

全

歌よみける序によめる。

かくばかり、をしと思ふ夜を、徒らに、寝て明かすらん、人さへぞうき。

題しらす

壬生忠岑

久方の、月の桂も、秋はなほ、もみぢすればや、てりまさるらん。

題しらす

小野小町

思ひつゝ、ぬればや人の、見なつらん。夢ど知りせば、さめざらましを。

題しらす

よみ人知らず

白雲に、はね打かはし、飛ぶ雁の、数さへ見ゆる、秋のよの月。

屏風に

源順

わが宿の、かきねや春を、隔つらん。夏來にけりど、見ゆる卯の花。

睦月ばかりに、津の國にありける頃、人の

もどにいひ遣しける。

能因法師

心あらん、人に見せばや、津の國の、難波わたりの、春のけしきを。

有國、大貳になりて下りける時、よみ侍り

ける。

藤原公任

別より、まさりて惜しき、命かな。君にふたゝび、あはんと思へば、

大覺寺に人々あまた集まりてふるき瀧

をよめる

全



漣の音はたなて久しく、なりぬれど、名こそ流れて、なほきこゆけれ。

題しらす 紫式部

たほかたの、秋のあはれを、思ひやれ、月に心は、あくがれぬとも。

題しらす 和泉式部

外山吹く、嵐の風の、音さけば、まだきに冬の、奥ぞしらるゝ。

源俊頼

鶉鳴く、まのゝ入江の、浪風に、尾花なみよる、秋の夕暮。

全

暮はてぬ、歸さは送れ、山櫻、たがために来て、まよふかどしる。

藤原基俊

霜さへて、枯れ行く小野の、岡邊なる、楢の廣葉に、時雨ふるなり。

藤原俊成

夕ざれば、野邊の秋風、身にしみて、鶉なくなり、深草の里。

全

駒どめて、なほ水かはん、山吹の、花の露をよ、井手のたま川。

時鳥

全

昔思ふ、草の庵の、夜の雨に、涙なとへそ、やまほとゝぎす。

二、催馬樂、今様。 ともに此時代の謠ひものなり。古は童謠の類まで、盡く五七調なりしを、奈良朝の末に至つて、初めて七五を以て始まれる童謠起りぬ、催馬樂中の葛城の曲これなり。催馬樂は多くこれより以後の謠ひものなれば、従て七五調のもの多し。今様は七五四句よりなれる謠ひものにして、此時代の末期に流行したり。

酒飲 (催馬樂)

酒をたうべて、たべ酔うて、たんどこりんどや、まうで来る、なよろばひそ、まうでくる。

浅緑 (全)

浅緑や、深い花田、染めかけたりと、見るまでに、玉光る、下光る、新京朱雀の、しだり柳、まだい、田居となる。前栽、秋萩、撫子花、唐葵、しだり柳。

蓬萊山 (今様)

蓬萊山には、千歳ふる、萬歳千秋重なれり、松の枝には、鶴巢くひ、巖が峽には、龜遊ぶ。



古き都（今様）

古き都を來て見れば、淺茅が原とぞ、なりにける。月の光は、隈なくて、秋風のみぞ、身にはしむ。

此他に、なほ朗詠と稱して、詩を和譯して謠ふこと、盛に行はれたり、純然たる日本文學にはならねど、後世の謠ひもの、語りもの等に、影響すること多ければ、特に此に其一例を示さん。

松根に寄りて以て腰を摩づれば、千年の翠、手に満つ。梅花を折り而頭に挿めば、二月の雪衣に落つ。

散文

勅撰集の例起こりてより、短歌は一般上流社會に流行せしかど、散文に至つては、なほ漢文を尊び、國文を以て、婦女子の業となす陋習を脱すること能はざること久しかりき。されば此時代の最大文學なる、源氏物語、枕草紙はともに婦人の手に成り、偶男子の手に成り

し、土佐日記の如きも、亦自ら婦人に擬して作りぬ。故に此時代の散文は、女らしく優美なること、短歌に過ぎたり。物語、草紙、日記、紀行等は、其主要なるものなり。

一、物語。物語は、上古の語部の語りたる物語に擬して起りたるものなれども、此時代の物語は、既に律語の臭味を帯ぶることなく、純然たる散文なり。物語に二種あり、作り物語、歴史物語これなり。作り物語とは、即ち小説にして、伊勢物語、竹取物語、源氏物語、を其主要なるものとす。其他大和物語、宇津保物語、住吉物語、落窪物語、狹衣等あり。

伊勢物語は在原業平の著と稱せらるれども、異説多し。短歌の小序を敷衍したるが如き、極めて短かき物語、數十篇より成れり。文章簡潔道健、他の平安朝の文字に似ず。竹取物語は高貴なる人々が、一美



女を娶らんとして相競へる状を寫したる、輕妙なる滑稽小説なり。源氏物語は五十四帖より成れる大著作にして、容儀才學並びに優れたる皇子を主人公とし、許多の特色ある男女を點出して、巧に世態人情を描破したるものにして、其文章も亦流麗婉美、細に入り微に入りて、能く宛轉委曲の妙を極む、蓋し我國空前の傑作なり、作者を紫式部と云ふ。

紫式部は藤原爲時の女なり、初め藤原宣孝に嫁して二女を生む。長女大貳三位は即ち狹衣の著者なり。早く夫に後れて、一條天皇の中<sup>宮</sup>皇上東門院に仕ふ、源氏物語は此時の著なり、才色ともに秀で、又貞操謙讓の名あり。

歴史物語は又雜史と云ふ、歴史上の事實を記したる物語なり、榮花物語、大鏡、今昔物語、宇治拾遺物語等あり。

榮花物語は宇多天皇の時より堀河天皇の時まで、大鏡は文徳天皇より後一條天皇までの事蹟を、藤原氏の盛運、ことに御堂關白道長の驕華の狀を中心として記したるものなり。大鏡は、崇徳天皇の時の人、藤原爲業の作、榮花物語は作者詳かならず、或は爲業の作と云ひ、或は赤染衛門の作なりと云ふ。赤染衛門は大江匡房の妻にして、歌に名あり。

今昔物語は、後三條天皇の時の人、源隆國の著なり。歴史上の逸話より、荒唐無稽なる巷談に至るまで、あらゆる口碑を、當時の俗語を以て、極めて平易に記述したるものにして、毫も彫琢を假らざる間に、自ら真情流露の妙あり、宇治拾遺物語は、此物語の後篇なるべしと云ふ。

二、草紙。草紙とは隨筆と云ふに同じ。枕草紙獨り有名なり。そは



清少納言が其見聞せる事物を記載し、批評せるものにして、其燃犀の才、銳利の筆、能く事物の真相を暴露し、最も縦横の氣に富み、蘊藉なる源氏の文と頗る其趣を異にせり、後人源氏とともに平安朝文學の雙璧とす。

清少納言は有名なる歌人清原元輔の女にして、一條天皇の皇后に仕へ、文才あるを以て頗る寵遇せられしが、後零落して終るところを詳にせず。

三、日記。紫式部日記、土佐日記最も有名なり。其他蜻蛉日記、和泉式部日記、讚岐典侍日記等あり。

紫式部日記は式部が上東門院に奉仕せりし間の日記にして、其文章は源氏物語の如く華美ならず、簡淨溫雅の調、能く作者の爲人を想見せしむ。土佐日記は貫之が土佐の國より歸京する時の紀行に

して、まゝ滑稽の文を交へたる輕妙なる文章なり。

母の文 (伊勢物語)

昔男ありけり。身はいやしなから、母なん内親王なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばし得まうです。ひとりにさへありければ、いと悲しうし給ひけり。さるは冬に、十二月ばかりに、頼の事とて、御文あり。驚きて見れば、別事はなくて、

老ぬれば、さらぬ別の、ありといへば、いよく見まく、ほしき君かな。

となんありける。これを見て、馬にも乗りあへず、參るとて、いといたう打ち泣きて、道すがら思ひける。

世の中に、さらぬわかれの、なくもがな。千代もといのる、人の子のため。

子安貝 (竹取物語)

日暮ぬれば、かの寮におはして見給ふに、まことに燕巢作れり、くらつ應申すやうに、尾をさへげて廻るに、荒籠に人を載せて、釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせて探るに、物もなしと申すに、中納言悪しく探れば、なきなりと腹立ちて、誰ばかりおぼぬんにとて、我のぼりて探らんと給ひて、籠にのりて、釣られのぼりて、窺ひ給



へるに、燕尾を捧げていたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめる物さばる時に、われ物握りたり、今はおろしてよ、翁、爲得たりとの給ひて、集りて疾くれろさんどて、綱を引き過ぐして、綱絶ゆる、即やしまの鼎のうへに、のけざまに落ち給へり、人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり、御目は白眼にて臥し給へり、人々御口に水をすくひ入れ奉る、からうとて御心地いかおぼさると問へば、息の下にて、物は少し覺ゆれど、腰なん動かれぬ、されど子安貝をふと握り持たれば、嬉しく覺ゆるなも、まづ脂燭さして、この貝顔見んと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまり置ける古糞を握り給へるなりけり、それを見給ひて、あなかひなのわざやどの給ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける。かひにもあらずと見給ひけるに、御心も違ひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず、御腰は折れにけり、中納言はいはけたるわざして病むことを、人に聞かせじとし給ひければ、それを病にて、いと弱くなり給ひにけり、貝をぬ取らずなりにけるよりも、人のきゝ笑はんことを、日にそへて思ひ給ひければ、たゞに病み死ぬるよりも、人聞き耻しく覺ゆる給ふなりけり。

我家のあれたるさま (土佐日記)

家にいたりて、門にいるに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ、聞しよりもまして、いふがひなくぞこぼれやぶれたる、家をあづけたりつる人の心もあれたるなりけり、なか垣こそあれ、一つ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり、さればたよりとどに物もたぬすえさせたり、こよひかゝる事と、こわだかにものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、心ざしはせんとす、さて池めいてくほまり、水づける所あり、ほどり松もありき、五年六年のうち、千年やすぎにけん、かた枝はなくなりけり、今生ひたるぞまじれる、たはかたみなあれ、にたれば、あはれとぞ人々いふ、思ひいでぬ事なく思ひ、戀しきがうちに、この家にうまれし女子の、もろどもにかへらねば、いかいは悲しき、舟人も皆子いだきてのゝしる、かゝるうちに、猶かなしみにたへずして、ひそかに心しれる人といへりける歌。

うまれしも、かへらぬものを、わがやどに、小松のあるを、見るがかなしき。  
見し人を、松の千年に、みましかば、どほくかなしき、わかれせましや。  
忘れがたく口惜しきこと多かれど、ぬ盡さず。

女は萬事を謹むべきこと (帚木の一節) 源氏物語



すべて男も女も、わるものは儘かに知れるかたの事を、残なく見せ盡さんと思へるこそいとをしけれ。三史五經の道々しき方を、明かに悟りわかさんこそ愛敬なからぬ。なほかは女といはんからに、世にあるもの公、私につけて、むげに知らずいたらすしもあらん、わざどならひ學ばねども、すこしもかきあらん人は、人の耳にも眼にもとまる事自然に多かるべし。さるまゝに眞字マコトをはしりがきて、さるまじきどちの女文に、半すぎて書きすくめたる、あなうたて、此人のたをやかならましかばとみゆかし。心地にはさしも思はざらめど、たのづからこはくしき聲に讀みなされなせしつゝ、ことさらびたり。これは上臈の中にも多かる事ぞかし。歌よびと思へる人の、やがて歌にまつはれ、をかしきふることをも初より取りこみつゝ、すさまじきをりくよみかけたるこそ物しき事なれ。かへしせねばなさけなし、ぬせざらん人ははしたなからん。さるべき節會なせ、五月の節に急ぎまゐるおした、何のあやめも思ひしづめられぬに、ぬならぬねをひきかけ、九日の宴にまづかたき詩の心を思ひめぐらし、暇なきをりに菊の露をかこちよせなせやうのつきなきいとなみにあはせ、さらでもれのづからげに、後に思へばをかくもあはれにもあべかりけること、そのをりにつきなく目にもとまらぬなせを、ねしはからずよみ出でたる、なか〜心おく

れて見ゆ。萬の事になせかはさてもとねばゆるをりから、時々思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情だゝざらんなんめやすかるべき。すべて心にしれらん事を、も知らず顔にもてなし、いはまほしからんことをも、一つ二つのふしはすぐすくなくんあべかりける。

秋の前栽 (野分の一節) 源氏物語

ひんがしの對の南のそばに立ちて、御前の方を見やり給へば、み格子ふたまばかり開けて、ほのかなる朝ぼらけのほせに、みすまきあけて、人々ゐたり。かうらんにもれしかゝりて、若やかなるかぎりあまた見ゆ、うちどけたるはいかゝあらん、さやかならぬあけぐれのほせ、いろ〜なる姿は、いづれどなくをかし。童べおるさせ給ひて、虫の籠かごせもに、露かはせ給ふなりけり。紫菀、撫子花の濃きうすきうすき籠かごせもに、女郎花の汗あせ衫かみなせやうの時にあひたるさまにて、四五人ばかりつれて、こゝかしこの草むらによりて、いろ〜の籠かごせもをもてさまよひ、撫子花なせのいとあはれげなる枝えだせも取りもてまゐる、霧きりのまよひはいと艶あやにぞ見ゆる。吹さくる追風はしいうのかに、ことに匂かほふ香かほのかをりも、ふれはひ給へるねはんけはひにやど、いと思ひやりめでたく、心けさうせられて、立出でにくけれと、忍びやかにうちたどなびて、歩み出て



たまへるに、人々けざやかに驚き顔にはあらねど、皆すべり入りぬ。

御衣をそむきさまにぬひたること (枕草紙)

南の院におはします比西の對に殿のおはします方に、宮もおはしますせば、寢殿にわつまりぬて、さうくしければ、ふれあそびをし、わたせのにあつまりぬなどしてあるに、これ只今どみのものなり、誰もたれもあつまりて、時かはさず縫ひてまゐらせよとて、ひらぬきの御ぞを給はせられたれば、南おもてにあつまりぬて、御ぞかたみづ、誰かどく縫ひ出るといふみつ、近くもむかはす、縫ふさまもいと物ぐるはし、命婦のめのと、どくぬひはて、うち置きつる、ゆだけのかたの御身をぬひつるが、そむきさまなるを見つせず、どちめもみあへず、まごひ置きて立ちぬるに、御せあはせんとすれば、はやうたがひにけり、笑ひの、しりて、これ縫ひなほせといふを、たれがあしう縫ひたりと知りて、かなはさん、綾などならばこそ、裏を見ざらん縫ひたがへの人の、げになはさめ、無紋の御ぞなり、なにをしるしにてか、なほす人たれかあらん、たゞまだぬひ給はざらん人になはさせよ、とてき、もいれねば、さいひてあらんやとて、源少納言、新中納言などいひなほし給ひし顔、見やりてゐたりしこそを、かしかりしが、これはよさのばらせ給はんとて、どくぬひたらん人をおもふとおほせられし。

風 (枕草紙)

嵐、木枯らし、三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる花風いとあはれなり、八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風いとあはれなり、雨のあしよこそさまにさわがしう吹きたるに、夏どほしたるわたきぬの、汗の香などかわき、すいしのひとへに、ひきかさねてきたるもをかし、此す、しだにいとあつかはしう、すてまほしかりしかば、いつのまにかう成ぬらんと思ふもをかし、曉、格子、妻戸などおしあげたるに、嵐のさど吹わたりて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ、九月つごもり、十月一日の程の空うちこもりたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉ものほろく、とこぼれ落つるいとあはれなり、櫻の葉、棕のはなごこそ落つれ、十月ばかりに、木立おほかる所の庭はいとめでたし。

野分の又の日こそ、いみしう哀におぼゆれ、たてじと見すいがないなどの伏しなみたるに、前裁せも心ぐるしげなり、おほきなる木もたふれ、枝など吹き折られたるだにをしきに、裁、女郎花などのうへによろぼひはひふせるいと思はずなり、格子のつはなごに、さどきはをこそさらにしたらんやうに、こまくと吹入たるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえぬ、いと濃ききぬのうはぐもりたるに、朽葉の織物う



す物なぞの、こうちぎ若てまことしく清げなる人の、夜るは風のさわぎに寐覺つれば、久しうねおきたるまゝに鏡うち見て、母屋よりすこしぬさり出たる、髪は風に吹まよはされて、すこしうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほぞ、まことにめでたし。物あはれなるけしき見るほぞに、十七八ばかりにやあらん、ちいさくはあらねど、わざと大人などは見えぬが、すゞしの單のいみじう綻びたる、花もかへりぬれなごしたる、湖色のどのの物をきて、髪は尾花のやうなるそぎすゑもたけばかりは衣の裾にはづれて、袴のみ鮮やかにて、そばより見ゆる。わらはへの、わかき人の根ごめに吹折られたる、前裁なごをとりあつめ、起こしたてなごするを、うらやましげにおしはかりて、つきそひたるうしろもをかし。

浦々の別の一節 (榮花物語)

帥殿は筑紫の方なれば、未申の方におはします。中納言殿は出雲の方なれば、丹波のかたの道よりとて、戌亥さまにおはする。御車をもひき出るまゝに、宮は御缺して、御手づから尼にならせ給ひぬ。内には此人々まかりぬ、宮は尼にならせ給ひぬ、と奏すれば、あはれ宮は唯にも御座さまいらむに、ものをかく思はせ奉る事と思し續けて、涙こぼれさせ給へば、忍びさせ給ふ。昔の長恨歌の物語なごも、かやうなる事にやど、

悲しう思ぼさるゝ事限りなし。此殿原のおはするを、世の人々の見るさま、少々物見にはまさりたり、見る人涙を流したり。哀に悲しき事は宜しき事なりけり。中納言殿は京出はて給ひて、丹波さかひにて御馬に乗らせ給ひぬ、御車は返し遣すとて、年頃仕はせ給ひける牛飼わらはに、此牛は我形見に見よとて給へば、わらはは伏しまろびて泣くさまことわりにいみじ。御車は都にき、我御身は知らぬ山路に入らせ給ふ程ぞいみじき。大江山といふ所に、中納言宮に御文書かせ給ふ。こゝまでは平らかにまうできつきて侍る。かひなき身なりとも、今一度参りて御覽せられてや、止み侍りなむと思ひ給ふるになむ。いみじうくるしう侍る。御有様ゆかしきなど、哀に書續け給ひて、

憂きことを、おほえの山と、知りながら、いよいよ深くも、いるわが身かな。

どなむ思給へられ侍るなご書給へり。宮には哀に悲しう、萬を思ひ惑はせ給ひて、物も覺えさせ給はず。唯左らぬ御有様に、かくさへ成らせ給ひぬる事と、返々内にも女院にもいみじくきこしめしおぼす。

尼地藏見たてまつる事 (宇治拾遺物語)

今は昔、丹波國に老いたる尼ありけり。地藏菩薩は曉ごとにありき給ふ事を、爪に聞



きて、曉ごとに地藏見奉らんとて、ひとよかい惑ひありくに、博打のうちばうけて居たるが見て、尼公は寒さに何事し給ふぞといへば、地藏菩薩の曉にありき給ふなるに、逢ひ参らせんとて、かくありくなりといへば、地藏のありかせ給ふ道は我こそ知りたれ、いざたまへ、逢はせ参らせんといへば、わはれ嬉しきことかな、地藏のありかせ給はん所へ、我を率ておはせよといへば、我に物を得させ給へ、やがて率て奉らんといひければ、この着たる衣奉らんといひければ、いざ給へとて、隣なる所へ率て行く。尼悦びて急ぎ行くに、其所の子にちどうといふ童ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、ちどうはと問ひければ、親おそびにいぬ、今來なんといへば、くはこゝなり、地藏のおはします所は、といへば、尼うれしくて、袖の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎて取りていぬ、尼は地藏見参らせんとて居たれば、親ももて心得ず、なごこの童を見んと思ふらんと思ふはせに、十ばかりなる童の來たるを、くはちどうといへば、尼見るまゝに、是非をも知らず伏し轉びて、拜み入りて、土にうつぶしたり、童すはへをもちて遊びけるまゝに來たりけるが、その楚して手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上までさけぬ、さけたる中より、えもいはすめでたき地藏の御顔見え給ふ、數多拜み入りてうち見上げたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拜み

入り参らせて、やかて極樂へ参りにけり。されば心にだにも深く念じつれば、佛も見え給ふなりけりと信すべし。



## 第四章 鎌倉時代

### 總説

平氏倒れて源頼朝幕府を鎌倉に開きし時より醍醐天皇の建武中興に至るまで、即ち紀元千八百年代の中葉より、千九百年代の末葉に至るまでを鎌倉時代と云ふ。

初め政柄武門に歸して、平氏先づ起こるや、一門皆公卿となり、萬事藤原氏に擬し、終に其覆轍を蹈みて、久しからずして又亡びぬ。源氏これに鑑みて、初めて武道を以て政治の主義となせしむは、平安朝以外に特色ある文學は、初めて此時代に、至つて顯はれたり。諸種の戰記文、東鑑、貞永式目の文の如きものこれなり。然るに歌は、古今集以來徒らに巧を文字の末に争ひし後を受けて、漸く衰運に向ひぬ。



連歌これに代つて起こらんとせしかど、未だ大に行はるゝに至らず、律語に於ては新古今集の外、殆んど見るべきもの尠なし。蓋し此時代は、前時代に比すれば、文學の一般に衰微したる時代にして、純粹なる漢文學の如きは、殆んど其跡を絶たんとせり。

律語

謠はざる歌に短歌有り、謠ひものに今様と宴曲とあり。

一、短歌。前時代の末より、歌を比較して其巧拙を争ふ歌合と云ふこと流行し、又歌の修辭法を論ずる書續々顯はれて、歌調の流暢巧妙なること殆んど其極に達したるものを、此時代初期の勅撰、新古今集の歌となす。然るに、かく言語の修飾に専心せし弊害として、歌の本質たるべき思想の修養は、却て等閑に附せられしのみならず、師範家と稱するもの起こりて、諸種の煩雜なる方式を立て、歌

の發達を妨害せしかば、新古今以後、歌道は急に衰微して、新勅撰以下續後拾遺に至るまで、**八部の勅撰集**あれども、殆んど見るべきものなし。故に此時代の歌人の有名なるものは、多く新古今集中の歌人にして、藤原定家、藤原家隆、僧西行、源實朝等は、其最なるものなり。其他後鳥羽、土御門、順徳の三上皇を初め、式子内親皇、僧寂蓮、鴨長明、宮内卿等皆一代の名人と稱せらる。

定家は俊成の子にして、新古今集及び有名なる小倉百人一首の撰者なり。歌を以て朝廷に仕へ、官權中納言に至る、子孫累世歌を以て家を成じ、稱して師範家と云ふ、二條家冷泉家これなり。家隆亦新古集撰者の一人にして、俊成の門人なり。官、宮内卿に至り、歌は定家と並び稱せらる。西行は初め佐藤憲清と稱して鳥羽院北面の武士なりき、若年に出家して西行と號す、資性恬淡營利を求めず、其歌亦自



ら飄逸脱俗の姿あり。家集を山家集と云ふ。以上三人は新古今集の泰斗なり。

鎌倉右大臣實朝は定家の弟子なりしかと、専ら萬葉の古調を慕ひて、新古今以外、別に一家を成しぬ。其咏適健なるもの多し、家集を金槐集と云ふ。

守覺法親王家の五十首歌に

藤原定家

春の夜の夢の浮橋、とだへして、峯に別かる、横雲の空。

霜まよふ空にしをれし、かりがねの、歸る翅に、春雨ぞふる。

西行法師すゝめて百首歌よませ侍りけるに 全

見渡せば、花も紅葉も、なかりけり。浦の苫屋の、秋の夕暮。

五十首歌奉りし時

藤原家隆

櫻花夢かうつゝ、か、しら雲の、たねてつれなき、峯の春風。

題しらす

全

ながめつゝ、思ふもさびし。久方の、月の都の、有明の空。

獨對月

西行法師

まこと、は、たれか思はん、ひとり見て、後にこよひの、月をかたらば。

題しらす

全

津の國の、難波の春は、夢なれや。あしの枯葉に、風渡るなり。

題しらす

全

道のべの、清水流る、柳影。しばしとてこそ、立どまりつれ。

題しらす

寂蓮法師

さびしさは、其色としも、なかりけり。まさ立つ山の、秋の夕暮。

月前松風

鴨長明

ながひれば、千々に物思ふ、月に又、我が身ひとつの、峯の松風。

五十首歌奉りし時に湖上花

宮内卿

花さそふ、比良の山風、吹きにけり。漕ぎ行く舟の、わど見ゆるまで。

題しらす

式子内親王

花すゝき、又露ふかし。ほに出で、ながめじと思ふ、秋のさかりを。

夏月をよめる

源頼政



庭の面は、まだかはかぬに、夕立の、空さりげなく、すめる月かな、

柳

源 實朝

青柳の、糸もてぬける、白露の、玉こさちらす、春の山風。

霞

全

武士の、矢なみつくろふ、籠手の上に、あられたばしる、那須の篠原。

題しらす

全

山はさけ、海はあせなん、世なりとも、君にふた心、われあらめやは。

二、今様宴曲。

催馬樂すたれて、今様ひとり流行せりしが、此期の

末に、宴曲といふもの起りぬ。今様を長く連ねて、朗詠を混じたる如

きものなり。

四季 (今様)

慈 鎮 和 尙

春の彌生の、曙に、四方の山邊を、見渡せば、花盛りかも、しら雲の、かゝらぬくまぞ、なかりける。

花桶も、匂ふなり、軒のあやめも、かをるなり、夕暮さまの、五月雨に、山杜鵑、なのりして、

秋の始めに、なりぬれば、今年も半は、過ぎにけり、わがよふけ行く、月影の、かたむく見ること、哀なれ。

冬の夜寒の、朝ぼらけ、契りし山路は、雪深し、心のあどは、つかねども、思ひやること、哀なれ。

秋興

蕭颯たる涼風、一時の秋を告ぐとかや、槐花雨に潤ふ、桐葉風涼し、林をいろぞる紅葉、  
緑苔を掃ふもてなし、是皆秋の興を増し、色々にみゆる百種千種の花のひも、早解け  
そひるいと萩に、亂れて結ぶ白露、薄霧の立つ旅衣の、袖かどまがふ初尾花、分け行く  
末もはるくと、どほのかにさけは妻籠に、男鹿鳴野の真葛原、未枯れぬれば蟲の音も、  
絶々よわる夕暮、よしさらば、今夜はこゝに宿らん、男山、花にあだ名は立ちぬども、我  
脱ぎ懸けん藤袴、なまめき立てる女郎花、げにそもぬならぬ色なれば、あたりのゆか  
りまでも、心置かるゝ夕露の、手枕さひきかりがねの床、第一に心を病ましむる、何の  
處にかすぐれたる、月の明なる前、此夜はじめて長ければ、かうくたる星のわけな  
んどする曉、壁に背ける灯の、幽にのこる窓の中。

散文



此時代には、漢語漢文脈を混じたる戦記文の類、初めてあらはれしかば、平安朝の文章に似たる文章も、なほ未だ滅せず。其種類より云へば、日記、紀行、歴史、物語、隨筆、戦記文、及び平家物語等の語り物あり。』

一、日記、紀行。定家の子、爲家の室、阿佛尼の十六夜日記、後深草院の辨内侍日記有名なり。ともに平安朝の文に倣ひて作りたるものにして、閑雅なる文章なり。其他中務内侍日記、源親行の東關紀行、源光行の海道記等あり。

二、歴史物語。中山親忠の水鏡、作者詳らかならざる今鏡をおもなるものとす。水鏡は天<sup>神</sup>武天皇より仁明天皇に至るまで五十四代の事蹟を記したるものにして、文體頗る大鏡に似たり。今鏡は榮花物語に倣ひて作りたるものにして、榮花の後を承けて、後一條院より高倉院の頃までを記せり。皆平安朝の名文に比して遜色あるこ

とを免れず、其他舊話を聚めて、教訓の資となしたる十訓抄、作者未詳。今昔物語の體裁に倣ひて編みたる古今著聞集、橘成季著は文体稍新らしくして、中古文より戦記文に移らんとする過渡を示すものなり。

三、隨筆。鴨長明の方丈記は唯一の有名なる隨筆なり。其見聞せし大火、飢饉、大風、大地震等を基として、厭世の感慨を記したるものなり。中古の文脈に多く漢語を交へて、信僣に陥らず、叙事叙情ともに縦横自在の致あり。

長明は京都鴨神社の社人なり、和歌に巧なるを以て後鳥羽上皇に召されて、和歌所の寄人となる、後社司とならんとして許されざりしかば、遂に出家して蓮胤と號し、大原山に方丈の室を造りて、此に住す。方丈記と四季物語とは其著書の主要なるものなり。



四、戦記文。亦歴史上の物語なれども、從來の歴史物語が、専ら皇室攝關等殿上の事蹟を記するに専なりしに似ず、主として武家の興亡、戦鬪の勝敗を記するものなれば、其文章も亦閑雅優美なる榮花、大鏡の文と全く撰を異にせり、これ戦記文としてことにこゝに區別する所以なり。

戦記文に、保元平治の戦亂を記したる保元物語、平治物語、源平兩氏の盛衰を記したる源平盛衰記あり、皆作者を詳らかにせず、或は葉室大納言時長の著なりといへど、前二書と後一書とは其文體稍異なれば、學者多くこれを疑ふ。されど要するに三書ともに、漢語俗語のみならず、漢文脈をさへ交へて、或は勇壯快活なる、或は悲痛慘憺たる人事の高調を、最も適切に描破したるものにして、此時代の散文の粹と稱せらる。

五、平家物語。此書は平家の盛衰を記したる一種の戦記にして、諷誦せんが爲めに作られたるものなり。此書も、葉室時長の作なりといひ、或は信濃前司行長の作なりといへど、終始佛教思想より成りて、又頗る佛語に富めるを見れば、或は僧徒の手に成りしものならんか。行文最も流暢、まゝ律語に似たるどころあるは其特質にして、後世の謠曲、淨瑠璃等の起源なるが故に、ことに普通の戦記以外に表出しぬ。義經記、曾我物語はこれと同種類のものなり。

十七日の條 (十六夜日記)

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとゞまる。月出で、山の峯にたちつゝきたる松の木の間、けぢめみわたいておもしろし。こゝは夜ふかき霧のまよひに、たゞりいでつゝさめが井といふ水、夏ならばうち過ぎましやとおもふに、かち人はなほ立よりてくむめり。

むすふ手に濁る心を、すゝぎなば、うさよの夢や、さめがゐの水。



とぞおぼゆる。美濃國、關の藤川わたるほどに、まづおもひつゝけつゝ、  
わがこども、君につかへんためならで、わたらましやは、關の藤川。  
不破の關屋の板庇は、今もかはらざりけり。

ひまればき、不破の關屋は、このほどの、時雨も月も、いかにもるらん。  
關よりかさくらしつる雨、しぐれに過ぎてふりくらせば、みちもいとあしくて、心よ  
り外に、笠縫のむやまといふ所に、くれはてねどとゞまる。

旅人は、笠うちかはらふ、夕暮の雨にやどかる、笠縫の里。

人世の無常 (方丈記)

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にわらず、よどみに浮ぶうたかたは、  
かつきえかつ結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、又かくの如  
し。玉敷の都のうちに、棟を並べ薨をあらそへる、たかきいやしき人のすまゐは、代々  
をへて盡させぬものなれど、是をまことかどたづぬれば、ひかしありし家はまれな  
り。あるは去年やぶれて今年は作り、あるは大家はるびて小家となる。すむ人も之に  
おなじ。處もかはらず、人もおほかれせいにしへ見し人は、二三人が中にわづかに  
一人二人なり。朝に死に夕にうまるとならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。しらすう

まれ死ぬる人、何方よりきたりて、いづ方へか去る。又しらす、かりのやせり、誰が爲め  
にか心を惱し、何によりてか目を悦ばしむる。其あるとすみかど、無常をあらそふ  
さま、いは、朝がはの露にことならず、あるは露落ちて花残れり、残るといへども朝  
日にかれぬ、あるは花はしばみて露なほさえず、消えずといへども夕をまつことな  
し。

實盛討たる、事 (源平盛衰記)

平家の侍、武藏の國の住人、長井齋藤別當實盛は、我れ七十有餘に年開けたり。今は後  
榮期する事なし。終に遁るべき身にわらず、何れの國にても死なん命は同じ事と思  
ひ切つて、赤地の錦の鎧直垂に、黒糸威の鎧を着、十八差したる石打の征矢負うて、只  
一人進み出で、死生知らずにと戦ひける。木曾の手に、信濃國住人、手塚太郎光盛と  
云ふ者あり。實盛に目を懸けて歩ませよる。實盛もまた手塚に目を懸けて進んでか  
ゝり、手塚近寄りて、誰人ぞ、只だ一人残り留りて軍し給ふは、大將軍か侍か、心にくし  
名乗れ、斯く申すは、信濃國諏訪郡住人、手塚太郎金刺光盛と云ふ者なり。能敵を名乗  
り給へや、組み給へと云ひ懸けて、互に駒を早めたり。實盛申しけるは、あゝさる者あ  
りと聞く、戸様あり名乗まじ、汝を嫌ふには非ず、只だ首を取つて源氏の見參に入れ



よ能き所領の價あるべし。徒に淵瀬に捨つべからず。木曾殿は見知り給はんずるなり。思ひ切つたれば一人留りて戦ふなり。敵は嫌ふまじ、軍の習は勝負をすること面白けれ。寄り合はせ手塚と云ふまゝに、弓をば捨て、無下に近づき寄合す。手塚が郎等主に組ませしとて、馬手に並べて中に隔たり。實盛押並べてむすど組み、己は手塚が郎等にや、餘すまじと云ふまゝ、鎧の押付の板をつかまへ、左の手にて手綱かいて、左右の鎧を強く踏んで引き落とし、馬の腹に引付けて提げもてゆく。足は地より一尺許り舉りたり。手塚是を見て、郎等を討たせしとて、馳せ並べて、敵の鎧の袖に掴み付きて、曳音を出して鎧を越え、我先にぞ落ちたりける。實盛二人の敵にあひしらはんどせし程に、三人組み合うて、馬より下へ落ちたりけり。實盛手塚が郎等押へて、刀を抜き、頸を掻く。手塚其間に實盛が弓手の草摺引き上げて、柄も拳も透れどさし、纏て上に乗り得て、頸を掻き、水も溜らす切りにけり。手塚敵の首と郎等に持たせて、木曾の前に持つて行き申けるは、光盛辦者の頭取つて候。名乗れと申せば存する旨あり。名乗るまじ、木曾殿は御覽と知るべしと計りにて名乗らず。侍かど見れば、錦の直垂を服たり。大將軍かと思へば、續くものなし。京家西國の者かどすれば、阪東聲なりき。若き者かと思へば、面の皺七十餘りに曇り。老者かどすれば、鬚鬚黒らして盛

りと見ゆ。何者の首ならんと申す。木曾打案じて、おはれ武藏の齋藤別當にや有らん。但し其は一年少目に見しが、白髪の精尾に生ひたりしかば、今はこの外に白髪になりぬらん。鬚鬚の黒きはいかゞやらん。面の老様はさもやと覺ゆ。實に不審なり。樋口は古同僚、見知りたるらんとて召されたり。髻を取り引き仰げて、一目打見てはらゝと泣き、空無慙や、實盛にて候ひけりと申す。いかに鬚鬚の黒きはと問ひ給へば、樋口、されば其事思ひ出でられ侍り。實盛日頃申置き候ひしは、弓矢取者は、老體にて軍陣に向はんには、髪に墨を塗らんと思ふなり。其故は、合戦ならぬ時だにも、若き人は白髪を見てあなづる心あり。况や軍場にして、進まんとすれば古老氣なしと惡み、退く時は、今は分に叶はずと謗らん。實に若き人と先を諍ふも憚り、敵も甲斐なき者に思へり。悲き者は老の白髪に侍り。されば俊成卿述懐の歌に、  
 澤に生ふる若菜ならねど、徒らに、年をつむにも、袖はぬれけり。  
 と讀み侍るとや。人は聊の物語のついでにも、後の形見に、言をば殘し置くべき事に侍る。云ひしに違はず、墨を塗りて候ひけり。年來、内外なく申し、事の衰さに、樋口次郎兼光、水を取り寄せて、自らはを洗ひたれば、白髪尉に成りにける。さてこそ一定實盛とは知れにけれ。大國の許由は、耳を潁川の水に濯ひて、名を後代に留め、我朝の



實盛は、髮を戦場の墨にそめて、悲みを萬人に催したり、木曾宣ひけるは、親父帶刀先生をば、悪源太義平が討ちたりける時、義仲は二歳に成りけるを、畠山に仰せて尋ね出して、必ず失ふべしと傳へたりけるに、如何が稚き者に刀を立てんとて、我は知らざる由にて、情深くこの齋藤別當が計へ遣して、發へと云ひければ、請け取り養はんとしけるが、七箇日置いて、東國は皆な源氏の家人なり、我れ人に憑まれて、此兒を養ひ立てざらんも人ならず、育ておかんもあたりいふせし、と案じなして、木曾へ遣しける志、偏に實盛が恩にあり、一樹の陰、一河の流れと云ふためしもあるなれば、實盛も義仲が爲には七箇日の養ひ父、危き敵中を計らひ出だしける、其志争でか忘るべきなれば、此首よく孝養せよとて、さめくと泣きければ、兵共も各々袖を絞りけり、抑々實盛、石打の征矢を負ひ、錦の鎧直垂を着る事は、今度北國へ下りける時、内大臣に申しけるは、實盛東國の打手に下向して、矢一も射す、蒲原より歸り上りし事、老の耻と存じ候ひき、今度北陸道に罷り下りなば、年開け身衰へて侍れ共、眞先蒐けて討死せん事勿論なり、實盛所領に付いて、近年武藏に居住なれ共、本は越前國の住人にて、北國は舊里なり、先祖利仁將軍、三人の男を生む、嫡男越前にあり、齋藤と云ふ、次男加賀にあり、富樫と云ふ、三男越中にあり、井口と云ふ、彼等の子孫繁昌して、國中互ひに相

親む、されば三箇國の宗徒の者共、内戚外戚に付いて、親類一門たらざるものなし、實盛討死して候は、當國他國の者共集りて、別當は何をか着たる、如何なる装束をかしたると、見沙汰せん事耻かし、故郷へは、錦の袴を着て歸ると云ふ事に侍れば、今度生國の下向に、錦の直垂に、石打の征矢御免を蒙り候はん、且は、最後の御恩なりと所望申しければ、初めは免し給はざりけるが、既に打立處に、實盛思ひ切つたる顔の氣色、且つは衰れに思ひ、且つは軍を勸めんが爲に、大臣の、我料とて秘藏せられたりけるを取り出して下し給へり、實盛畏り給はりて、千秋萬歳の心地して、着たりける、是を聞きける大名小名、袖を絞らぬはなかりけり、

鳥羽僧正の事 (古今著聞集)

鳥羽僧正は、近き世にはならびなき繪書なり、法勝寺金堂の扉の繪書きたる人なり、いつ程のことにか、供米不法の事ありける時、繪にかゝれける、辻風の吹たるに、米の俵をおほく吹き上げたるが、塵灰の如くにわがるを、大童子、法師ばらはしりより、取りとめんとしたるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入興ありけり、その心を、僧正に御尋ありければ、おまりに供米不法に候ひて、實の物は入り候はで、糟糠のみ入りて、軽く候ふゆゑに、辻風に吹き上げられ候ふを、さりとてはとて、小法師原



が取りどいめんとし候ふがをかしう候ふを、書きて候ふと申されければ、比興の事なりとて、それより供米の沙汰さびしくなりて、不法の事なかりけり。

小原御幸 (平家物語)

かゝりし程に、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御住居、御覽せまはしく思し召されけれども、二月三月程は、嵐烈しく、餘寒も未だ盡さず、峯の白雪絶えやらで、谷の氷柱も打解けず。かくて春過ぎ、夏立ちて、また祭も過ぎしかば、法王、夜をこめて小原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺、花山の院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひける。鞍馬通の御幸なりければ、彼の清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太皇后の舊跡御覽ありて、それより御輿に召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残を惜まる。卯月二十日餘の事なれば、夏草のしげみが未を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽となれたる方もなく、人跡絶たる程も、思し召し知られて哀なり。西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院是なり。古く造りなせる泉水、木立よしある様の所なり。いらか破れては、霧不斷の香を焼き、どぼそ落ちては、月常住の燈をかゝるとは、かやうの所をや申すべき。庭の若草繁りあひて、青柳糸を亂

りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を曝すかどあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うらむらさきに咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待顔なり。法皇これを御覽ありて、かくろあそばされける。

池水に、みぎはのさくら、散りしきて、波の花こそ、さかりなりけれ。

ふりにける岩の絶間より、落ち来る水の音さへ、ゆゑよしある所なり。緑蘿の垣、翠苔の山、繪に書くとも筆も及びがたし。さて女院の御庵室を御覽あるに、軒には、萬葉道ひかゝり、葱交りの忘草、簾、風々空し、草、顔淵が菘にしげし。藜藿深くどざせり。雨、原憲が櫃を濕すともいひつべし。板の苔きめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月陰に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小篠に風さわぎ、世に絶えぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結べるませ垣や、僅に言とふものどては、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、是等か音づるならでは、まささかのかづら青つゝ、いら来る人稀なる所なり。(下略)

此他に、後世の書簡文の起源となりたる、一種の文體あり。そは拙劣なる漢文、或は日本化したる漢文とも稱すべきものにして、此時代



の普通文として、法令、日記、記録等に用ゐられし文體にして、東鑑、貞永式目、明月記の類の文これなり。今一例を左に抄出す。

可修キ理リ神シ社シヤ專ズ祭サ祀シ事シ（貞永式目）

右、神者依ヨ人之敬キョウ増ゾウ威イ人者依ヨ神之德トク添ソフ運ウン然則恒例之祭祀不致凌夷如在之禮莫令怠慢因茲於關東御分國々并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也兼又致有封社者任代々符小破之時且加修理若及大破言上子細隨其左右可有其沙汰矣

### 第五章 室町時代

#### 總説

紀元千九百年の末葉、後醍醐天皇の建武中興より、南北朝、足利、織田、豊臣時代を経て、紀元二千二百年代徳川氏の元和偃武に至るまでを總稱して、室町時代と云ふ。蓋し京都室町に覇府を置きし足利氏の世が、此時代中、文學の最も盛なりし時期なればなり。

此時代は過半戦亂の世なれば、四民皆自營に急にして、文筆を弄する閑日月に乏しかりければ、文學は殆んど極衰の域に達し、僅かに一縷の命脉を、僧侶遁世者の間に保ちぬ。されば文學の見るべきものは、多く僧侶、隱者の手に成れり。

謠曲、連歌及び太平記、徒然草等は、此時代の文學の主要なるものに



して、其なかに連歌が、足利時代の小康に際して、稍下層の社會にも行はれしことは、頗る注意すべき事なり。蓋し奈良朝以後湮滅せりし下層社會の文學が、次の時代に至りて、再び大に盛ならんとする機微を示すものなればなり。

律語

短歌益衰へて連歌流行し、前時代に顯はれたる語り物は發達して、謠曲と稱する一種の律語となりぬ。この謠曲は實に此時代の最大文學なり。

一、短歌。前時代の衰運を受けて、師範家の所謂歌道は彌煩雜を極め、口傳傳授の如きこと行はれて、短歌は益衰へぬ。此時代には風雅集以下五種の勅撰集あれども、皆見るに足らず、却つて南朝弘和年中、宗良親王の撰ひ給ひて、勅撰に準せられし新葉集と、頓阿法師

の草庵集とを有名なるものとす。而して紀元二千年の頃、後花園天皇の永享年中に撰はれし新續古今に至りて、勅撰の例全く絶はぬ。

古今集より此集に至るまで、勅撰二十一集あり、これを二十一代集と云ふ。

此時代の歌人は、頓阿、兼好等二三の僧徒外聞ゆるものなし、皆初期の人なり。頓阿は初め藤原貞宗と云ふ、出家して比叡、高野に學び、後京都に歸住す。歌を以て屢北朝の光嚴天皇に召されき。草庵集の外、井蛙抄、愚問賢注等の歌學の著書あり。兼好は頓阿の親友にして、其歌又伯仲の間に在り、されど彼は歌人としてよりは、寧ろ散文家として有名なり。

二、連歌。短歌の上の句と下の句とを分ちて、二人にて詠する連歌は、奈良時代より起りしが、其連歌を又數多連ねて、五十句百句千



句等と成したる連歌、前時代より起こり、此時代に至りて初めて盛に流行しぬ。北朝の後光嚴天皇の延文元年、二條良基、僧救濟等、菟玖波集を撰し、勅撰に準せらる、これ連歌集の始なり。後宗祇法師又新菟玖波集を撰す。蓋し連歌は其用語自由にして、短歌の如く古語のみを襲用することなきが故に、古學の智識なきものもこれを弄ぶことを得て、一時大に民間に流行し、下層社會に頗る文學趣味を流布しぬ。

此時代には周阿、救濟、宗砌、宗祇、宗長、肖拍等、有名なる連歌師多きがなかに、宗祇法師最も名あり。宗祇は連歌の最盛時代なる後土御門天皇の時に出て、古今無比の名人と稱せらる。又短歌に巧にして、有名なる古今傳授の祖、東常縁が第一の弟子なり。

三、謠曲。前時代より行はれし田樂、猿樂等發達して、能と稱する

舞樂此時代に顯はれ、この樂に合せて語るが爲めに、平家物語等の語り物に、今様、宴曲等を折衷して、創作したる、特殊の律語を謠曲と云ふ。會話の部分を除けば、總て宴曲に似て、七五調の中に古歌、朗詠等挿み、宛轉流暢の妙を極めたり。蓋し此時代の文學中、最も貴重なるものにして、此時代より江戸時代の初期までに成りしもの二百篇に上れり。其構造は或は歴史上の事實に假托し、或は當時の巷談を敷衍して、因果應報、無常寂滅の教理を説きたるもの多ければ、此時代の他の文學と同じく、僧侶、遁世者等の手に成りしものなるべけれど、作者の名は多く没して傳はらず。

河上春月

頼阿法師

たが袖の憂きならひより霞むらん涙の川の春の夜の月

閑居

かくれ家も今は尋ねじ、いづくにもさてすまふこと、静かなりけれ。



世をのがれて木曾路といふところを過ぎて 兼好法師  
思ひたつ木曾のあさぎぬあさくのみ染めてやむべき袖の色かは

夜述懐

全

こしかたの世のうきことをかぞふかもねられぬ夜半の鴨の羽かき

夕立

宗 祇 法師

行きなやみてる日にたのむ木のもとにはぬるとも出でん夕立の空

河越千句の一節(連歌)

遠く見て行けば霞まぬ春野かな

宗 祇

明る梢ののどかなるころ

義 藤

月うすし峯の櫻にうつろひて

道 真

はのくらし江に水落つる山

心 敬

浪さむく火を焚く村の夕間暮

満 助

かく長く連ねたる連歌は、上の句或は下の句を共有せる、數多の短歌の連続の如きものにして、第一句と第二句、或は第二句と第三句の如く、すべて相隣れる二句が、短歌の上の句、下の句の如き關係を有せるのみ、數句或は全體に通じては、何等の意味もなし、江戸時代の俳諧も亦これに同じ。

竹生島謠曲

臣下竹に生るゝ鶯の、竹生島詣いとがんともともこれは、延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり、さても江州竹生島の明神は、靈神にて御座候ふ間、此たび君に御暇を申し、唯今竹生島に參詣仕り候ふ、四の宮や、河原の宮居末はやき、名も走井の水の月、くもらぬ御代に逢阪の關の宮居を伏し拜み、山越ちかき志賀の里、鴨の浦にも着きにけり、急ぎ候ふほどに、鴨の浦に着きて候ふ、あれを見れば、釣舟の來り候ふ、しばらく相待ち、便船を乞はゞやと存じ候ふ。

漁翁おもしろや、頃は彌生のなかばなれば、波もうらゝに海のれも、遅霞みわたれる朝はらけ、漁翁のどかに通ふ船の道、漁翁廻うきわざとなきこゝろかな、漁翁これに此浦里に住みなれて、明暮はこふうろくづの、二人數を盡して身ひとつを助けやせん、とわび人の、ひまも波間に明けくれて、世をわたるこそ物うけれ、よし〜同じわざながら、世にこねたりな此海の、名所ればき數々に、浦山かけてながむれば、志賀の都花園、むかしながらの山櫻、眞野の入江のふなよばひ、いざさしよせて事問はん、臣下いかに是なる船に便船申さうのう、漁翁これは渡し船にてもなし、御覽候へ釣船にて候ふよ、臣下こなたも釣舟を見て候へばこそ便船とは申せ、これは竹生島に



はじめて參詣の者なり。誓の船に乗るべきなり。流翁げに此所は靈地にて歩み運  
 び給ふ人を、どかく申さば御心にも違ひ、又は神慮もはかりがたし。廻さらば船を  
 參らせん。臣下うれしや、さてはむかひの船法の力とればえたり。流翁けふは殊更の  
 せかにて、心にかゝる風もなし。地名こそさゝ波や、志賀の浦にた立ちあるは、都人か  
 いたはしや、た船にめされて浦々をながめ給へや。處は海の上、國は近江の江に近き、  
 山々の春なれや、花はさながら白雪のふるか残るか時しらぬ。山は都の富士なれや、  
 なほさえかへる春の日に、比良の嶺わろし吹くども、沖こゝ船はよも盡きじ。旅の  
 ならひの思はずも、雲井のよそに見し人も、同じ船に馴れ衣、浦をへだて、行くはせ  
 に、竹生島も見えたりや。流翁緑樹かけ沈んで、地魚樹にのぼるけしきあり。月海上に  
 浮んでは、兎も波を走るか、たもしろの島のけしきや。流翁舟が着いて候ふ。御上り候  
 へ。臣下あらうれしや、やがて神前へ參り候ふべし。流翁この尉が御道しるべ申さう  
 するにて候ふ。これこそ辨財天にて候へ、よくく御祈念候へ。臣下承り及びたるよ  
 りもいやまさりて、有りがたう候ふ。不思議やな、此の島は女人禁制とこそ承りて候  
 ふに、あれなる女人は、何とて參られて候ふぞ。流翁それは知らぬ人の申しごとにて  
 候ふ。かたはけなくも此島は、九生如來の御再誕なれば、殊に女人こそまゐるべけれ。

廻のふそれまでもなきものを、地辨財天は女體にて、その神徳もあらたなる。天女と  
 現じればしませば、女人とてへだてなし。たゞ知らぬ人の言葉なり。かゝる悲願をた  
 こして、正覺年ひさし。獅子通王のいにしへより、利生さらになこたらず。流翁げにく  
 かほと疑ひも、地荒磯じまの松陰を、たよりによする海人小舟、われは人間にあらす  
 とて、社壇の扉をおしひらき、御殿に入らせ給ひければ、翁も水中に入るかど見しが、  
 白浪の立ち返り、われは此海のあるじぞと云ひすて、また波に入らせ給ひけり。  
 地御殿しきりに鳴動して、日月ひかりかゝやきて、山の端いづる如くにて、あらはれ  
 給ふぞかたはけなき。天女もく、これは此島に住んで、神をうやまひ國をまもる、  
 辨財天とはわが事なり。地その時虚空に音楽きこえ、花ふりくだる春の夜の、月にか  
 いやく少女の袂かへすくもおもしろや。

地夜遊の舞樂も時すぎで、月すみわたる海づらに、波風しきりに鳴動して、下界の龍  
 神あらはれたり。龍神湖上に出現して、ひかりもかゝやく、金銀珠玉を、かのまれ人に  
 さゝぐるけしきありがたかりけるさせくかな。龍神もどより衆生濟度の誓ひ地も  
 どより衆生濟度の誓ひ様々なれば、或は天女の形を現じ、有縁の衆生の諸願を叶へ、  
 又は下界の龍神となつて、國土を静め誓ひを現はし、天女は宮中に入らせ給へば、龍



神はすなはち湖水に飛行して、波を蹴立て水を返して、天地に群がる大蛇の形、天地に群がる大蛇の形は、龍宮に飛んで入りける。

### 散文

此時代に顯はれたる散文の有名なるものは、徒然草、太平記、正統記、増鏡の四書と狂言記とあるのみ。其他當代の博學、一條兼良の公事根源、花鳥餘情、藤原藤房の（北島理房）職源抄、古今集註等は學問上甚た有益なるものなれども、文學として傳ふべきものに非ず。

一、徒然草。兼好法師の隨筆なり。文體は方丈記に似て、筆力は其上に在り。其得意なる無常觀を論ずる邊の道健なる、其物語に擬したる小品文の婉麗なる、上、枕草紙に亞ぎ、下、江戸時代の和漢混合文の作者の好模範なりき。

兼好は吉田の神官卜部兼顯の子なり。出家して東國に遊び、後歸り

て雙岡に住す、没せし時残すところ、數卷の冊子と、黒衣二襲とのみなりしと、又以て其生平を窺ふに足るべし。遺稿は徒然草の外に、兼好法師家集あり。

二、太平記。南北朝の争亂を記したる戰記にして、作者は小島法師と稱する僧なりと云ひ、或は有名なる博學の僧、玄慧法師の作なりとも云ふ。其文章の壯大なること盛衰記に下らず、流暢なることこれに過ぎたり。後此書を朗讀すること行はれて、太平記讀と稱す、今日の軍書讀の初なり。

三、増鏡、神皇正統記。ともに歴史物語にして、増鏡は大鏡、水鏡等に倣ひて、後鳥羽院より後醍醐天皇までの事蹟を記したるものにして、一條兼良の子冬良の著なり。大鏡、水鏡を併せて三鏡と稱せらる、歴史家の好資料なり。



正統記は南朝の忠臣、准后北畠親房の著なり。帝室の正統は南朝なることを示さんが爲めに、神代より後村上天皇までの歴史を、皇統の繼承を眼目として記せるものにして、三鏡等の如く華麗なる修飾を用ゐず、最も簡明嚴正なる文章にして、まゝ議論を狭みたり、其熱誠なる精神の横溢するところ、凛として犯すべからざるものあり。親房の事蹟は、讀者の熟知せるところなれば、こゝに贅せず、此書は蓋し其隱遁後の著なり。

四、狂言記。滑稽を主とせりし猿樂は、一方には發達して優美なる能樂となり、他方には又滑稽を主とせる狂言として残りぬ。狂言記は此狂言の詞を記したるものにして、此時代より江戸時代の初期までに成りしもの百餘篇あり。滑稽の妙、人をして捧腹絶倒せしむるものに乏しからず。

人心の移り易きを嘆す (徒然草)

風も吹きあへずうつらふ、人の心の花に馴れにし年月を思へば、哀と聞きし言の葉をどに忘れぬ物から、我世の外になり行くならひこそ、なき人の別よりも勝りて、悲しきものなれば、白き糸の染まんことを悲しむ、道の衢のわかれんことを歎く人もありけんかし、堀川院の百首の歌の中に、

昔見し、いもが垣根は、あれにけり、つばなまじりに、莖のみして、

淋しきけしき、さること侍りけん。

無常の來ること水火よりも速なり (徒然草)

大事を思ひたゞん人は、さりがたく心にかゝらん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばしこの事果て、同じくは彼の事沙汰し置き、しかくの事人の嘲やあらん、行末難なくした、ゆ設けて、年ころもあればこそあれ、その事またん程あらじ、物騒しからぬやうになど思はんには、ぬさらぬことのみいといかさなりて、事の盡くる限もなく、思ひ立つ日もあるべからず。大體人を見るに、すこし心ある際は、皆このあらしにてど一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ、身を助けんとすれば、耻をも顧みず、財をも捨て、去るぞかし。命は人を待つも



のかは、無常のきたることは、水火の攻むるよりも速に遁れがたき物を、その時老いたる親いどけなき子、君の恩、人の情、すてがたしとて捨てざらんや。

正成兵庫に下向の事（太平記）

尊氏卿、直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戦はむために、兵庫に引き退きぬるよし、義貞朝臣、早馬を進らせて内裏に奏聞ありければ、主上大に御駭きありて、楠判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて合戦致すべし、と仰せられければ、正成畏りて奏しけるは、尊氏卿、已に筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらむ、御方の疲れたる小勢を以て、機に乗りたる大勢に懸合ひて、尋常の如くに合戦を致し候はば、御方必定打ち負け候ひぬと覺候ふなれば、新田朝臣をも京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸成り候ふべし。正成も河内へ罷り下り候ひて、畿内の勢を以て河尻を差し塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧をつからし候ふ程ならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日々に隨ひて馳せ集り候ふべし。其時に當りて、新田朝臣は山門より推し寄せられ、正成は搦手にて攻め上せ候はば、朝敵を一戦にて滅す事ありぬと覺候。新田朝臣も定めて此料簡候ふとも、路次にて一軍もせざらんは、無下にいふかひなく人の思

はんずる所を耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺候ふ。合戦はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。能く遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候ふと申しければ、誠に軍旅の事は兵に譲られよと諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門幸相清忠申されけるは、正成が申す所も其謂ありと雖も、征伐のために差し下されたる節度使、未だ戦を成さざる前に、帝都を捨て、一年の内に二度まで山門へ臨幸なさん事、且は帝位の輕きに似、又官軍の道を失ふ處なり。縦令尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を從へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡、戦の始より、敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻め靡けずといふことなり。是全く武略の勝れたる所にはあらず、只聖運の天に叶へる故なり。然れば只戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さん事、何の仔細かあるべきなれば、只時を替へず楠罷り下るべしと仰出されける。正成此上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へ下りける。正成是を最期の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様ありとて櫻井の宿より河内へ返し遣すとして、庭訓を残しけるは、獅子子を産みて三日を経る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ、其子獅子の機分あれば、敵へざるに中より跳返りて、死する事



を得ずといへり。況んや汝已に十歳に餘りぬ、一言耳に留らば我教誠に違ふ事なかり。今度の合戦、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、是を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是が汝が第一の孝行ならんずると、泣々申し含めて、正成主上より賜りたる菊作の刀を、形見に見よとてとらせ、各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公晋の國を伐ちし時、戦の利なからん事を鑒みて、其將孟明視に向ひて、今を限りの別れを悲み、今の楠判官は、敵軍都の西に近づくど聞きしより、國必ず滅びんことを愁へて、其子正行を留めて、なき跡までの義を進む。彼は異國の良駒、是は吾朝の忠臣、時千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、有り難かりし賢佐なり。正成兵庫に着きければ、新田左中將やがて對面し給ひて、寂慮の趣をぞ尋ね問はれける。正成長りて、所存の通りと勅定の様とを、委しく語り申しければ、誠に敗軍の小勢を以て、機を得たる大敵に戦はむ事、叶ふべきにてはなけれども、去年關東の合戦に打ち負けて、上洛せし時、路にて猶支へざりし事、人口の嘲り遁る

ゝ時を得ず。それこそあらめ、今度西國へ下されて、數箇所の城廓一も落し得ずして、結局敵の大勢なるを聞きて、一支もせず京都まで遠引したらひは、餘にいふかひなく存する間、戦の勝負をば見ずして、只一戦に義を勤めばやと存するばかりなり。と宣ひければ、正成重ねて申しけるは、衆愚の謬々たるは、一賢の唯々には如かずと申し候へば、道を知らざる人の讒をば、必ずしも御心に懸けらるまじきにて候ふ。只戦ふべき所を見て進み、叶ふまじき時を知りて退くこそ、良將とは申し候ふなれ。さてこそ暴虎憑河死而無悔之者不與と、孔子も子路を誡められし事の候ふ。其上元弘の初には、平大守の威猛を一時にくだかれ、此年の春は、尊氏の逆徒を九州へ退けられ候ひし事、聖運とは申しながら、偏に御計畧の武徳に依りし事にて候へば、合戦の方に於ては、誰か福し申し候ふべき。殊更今度西國より御上洛の上、御沙汰の次第一々道に當りてこそ存じ候へど申しければ、義貞朝臣誠に顔色解けて、通夜の物語に、數盃の興と添へられける。後に思ひ合すれば、是を正成が最期なりけりと、哀なりしことどもなり。

恩賞を争ふ者を誡むる論 (神皇正統記)

王土に生れて、忠を致し身を棄つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべき



に非ず、然れど後の人を勵まし、その跡をおはれびて、賞せらるゝは君の御政なり。下としてきはひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危むるはしなれど、前車の轍をみることは、まことにあり難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをばいましめられき。豪強になりぬれば必ずをどる心あり、果して身を亡ぼし家を失ふためしあれば、いましめらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを止むべしといふ制符、度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、ことある時は、宣旨を給はりて、諸國の兵をめしぐしけるに、近代となりては、やがてかたをいゝやからねはくなりしによりて、この制符は下されき。果して今迄の亂世の基なれば、いひ甲斐なきことになりけり。この頃のことわざには、一度軍にかけわひ、或は家の子郎徒、節に死ぬるたぐひもあれば、わが功にたきては、日本國を賜へ、もしは半國を賜はりても足るべからず、なぞ申すめり。まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれよりみだるゝはしどもなり、又朝威のかろくしさま、たしはからるゝものなり。言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも君を蔑にし、人にをどることはあるべからぬ事にこそ、さきに記し侍りし如く、かたき氷は霜を踏むよりいたる習なれば、

亂臣賊子といふものは、その始、こゝろ言葉をつゝしまざるよりいであるなり。世の中のおどろふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心のあしくなりゆくを、末世といふにや。中略大かたおのれ一身は、思にはこるとも、萬人に恨をのこすべき事をば、なぞか顧みざらん。君は萬性の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人にわかたせたまはん事は、おしてはかり奉るべし。もし一國づゝを望まば、六十六人にて塞がりなん。一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ。五百九十四人は喜ぶとも、千萬人の人はよろこばじ。いはんや日本の中、悉皆ながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。斯る心の萌して、言葉にもいで、面にはづる色のなきを、謀反のはじめといふべきなり。

水無瀬殿 (増鏡)

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ給へど、猶又、水無瀬といふ所に、ぬもいはすれもしろき院づくりして、しばし通ひおはしましたしつゝ、春秋の花もみちにつけても、御心ゆくかぎり、世をひいかして、遊びをのみぞし給ふ所がらも、はるくど川にのぞめる眺望、いとおもしろくなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、



見わたせば山もさかすむ、みなせ川ゆふは秋と、なにおもひけむ。  
 かやぶきの廊渡殿なほはるく、と、艶におかしうせさせ給へり。御前の山より瀧お  
 とされたる石のたゝすまひ、苔深きみやま木に、枝さしかはしたる庭の小松も、げに  
 く千世をこめたる霞の洞なり。前裁つくるはせ給へる頃、人々あまためして、御遊  
 びなごありける後、定家の中納言、いまだ下膳なりし時に、奉られける。  
 ありへけむもとの千年に、ふりもせで、わが君ちぎる、みねのわか松。  
 君が代に、せきいる、庭を、ゆく水の、いはこそ数は、千世も見ゆけり。

櫻諍 (狂言記)

主人是は此あたりの者でござる。此頃は何方も、花の盛ぢやと申す程に、花見に参り  
 たう存すれども、暇がなさに、参ることもぬ致さぬ。もはや暇に成てござる程に、今日  
 は花見に参らうと存する。先づ太郎冠者タロウクワンジャを呼び出し、申し附けう。やい太郎冠者ある  
 か。太郎冠者はあ、主人むたか。冠者御前に居ります。主人汝を呼び出すこと別のことで  
 はない。此頃は方々の花の盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならな  
 んだ。もはや暇になつた程に、花見に出うと思ふが、何と有らうぞ。冠者是は珍らしい  
 ことを被仰ます。此頃は櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽せられうと有れば、尤で

ござるが、珍らしからぬはなを御覽せられて、何とせらる。主人いやれのれは何事を  
 いふ。櫻も花も同じ事ぢや。冠者是は頼うだ人ども覺ぬことを仰せらる。左様に  
 被仰たらば、人中で恥をか、せられう。身共は苦しうござらぬが、主人して汝が其様  
 にいふは、仔細が有るか。冠者なか、仔細こそござれ。はなが見させられたくば、私  
 の鼻を見させられい。餘所へござるまでもござらぬ。主人いやれのれは言語同断の  
 ことをいひをる。汝が顔カノなは鼻といふ、花といふは別ぢや。冠者左様ではござらぬ。歌  
 なごにも、櫻とはよまれたれども、花とはよまれませぬ。主人なか、でもないこと  
 をいひをる。其歌をようて聴かせい。冠者ようで聴かせたらば、きもをつぶさせられ  
 う。主人いそいでよめ。冠者心得ました。櫻散る、木の下風は、寒からで、空に知られぬ、雪  
 ぞふりける。是は何と。主人こちらにも花といふ歌がある。冠者さらばようで聴かせ  
 られい。主人行き暮れて、この下陰を、宿とせば、花は今宵の、主ならまし。冠者此方にも  
 まだござる、山櫻霞の間より、ほのかにも、見ゆし人こそ、戀しかりけれ。主人それなら  
 此方にも有る、花の色は、うつりにけりないたづらに、我身よにふる、ながめせしまに。  
 冠者それならば、此方には、諍にござる。主人諍へ、聴かふ。冠者櫻かざして袖ふれて、主  
 人一段の諍うたふ。致しやうがござる。やい太郎冠者、花見車、暮る、より、月の花よ、



またうよ。冠者はあこれです。まゝ人總別何も知りなさいで、むざとしたりとをいひをつて、某とせりあひをる。あつちへうせい。冠者はあ。まゝゑい。冠者はあ。

## 第六章 江戸時代

### 總説

紀元二千二百七十年代、徳川氏の元和偃武より、二千五百二十年代、明治維新に至るまでを江戸時代と云ふ。  
此時代の初、京都には、後光明天皇の漢學を講じ給ふあり。關東には、徳川家康の藤原惺窩、林道春等の漢學者を召して、文教を獎勵するあり。前時代に於て、將に一たび滅せんとせし漢學は、此に於て大に盛運に向ひぬ。而して國文に於ては、俳諧、發句、淨瑠璃、小説等の通俗なる文學が、先づ戰餘の無學なる社會に歡迎せられしが、太平稍久しきに及びて、中古文を解釋すること漸く行はれて、遂に元祿の古學復興となり、寛政前後の雅文流行となりぬ。これと同時に、文字の



智識は、ますます下層社會に傳播せしかば、通俗文學も亦決して衰へざりき。されど、復古派の歌文は高古に偏し、通俗文學は卑近に流れ、ともに中正を得ざりしを、此の期に終に出でたる桂園派の歌と、次に説かんとする漢學者の和漢混合文とは、能くこれ等の弊を脱して、今日の歌文の模範とはなりぬ。

抑、我國の漢學は、古來隋唐の古説を守りしを、惺窩、道春等は、夙に宋の程朱の學を講じ、一時の名儒皆其門に出でしかば、天下靡然としてこれに歸せしが、中頃より、中江藤樹の陽明學、伊藤仁齋の古學、荻生徂徠の古文辭學、木下順庵の折衷學等起り、各門戶の見を持ちて、相争ふに至りぬ。此派は其學唐宋を派別せず、専ら該博を重んぜしかば、新古の漢學のみならず、又國學をも兼修する者出で、此時代の初期より漸次發達し來りし和漢混合文は、此派によりて大成

せられき。

江戸時代の文學は、かく複雑にして豊富なるがなかに、白石の和漢混合文、眞淵の長歌、宣長、春海の雅文、景樹の短歌、巢林子の淨瑠璃、西鶴、馬琴の小説、芭蕉の俳諧等は、此時代の國文學を代表するものなり。而して漢文には、林家編纂の本朝通鑑、水戸家の大日本史、賴山陽の日本外史等、著名なる日本歴史の書あり。其他林道春の羅山文集、齋藤拙堂の拙堂文集等を始め、名家の詩文集あけて數ふべからず。

律語

連歌は一轉して俳諧、發句となり、謠曲は淨瑠璃となり、謠ひ物には小唄、長唄等の俗謠行はれ、通俗なる律語大に起りしが、元祿の頃に至りては、短歌再び勃興せしのみならず、奈良朝以後久しく絶へたる長歌さへ起りぬ。今此時代の律語を、歌、狂歌、俳諧、俗謠、淨瑠璃の



五種として説かんとす。その後の四種は皆通俗文學なり。  
 一、歌。初期には、前時代の歌道極衰の後を承けて、拙劣なる師範家流の短歌のみ僅に行はれしが、元祿の古學復興期に至りて、萬葉集の歌風を慕ふもの前後相輩出しぬ。これを萬葉派といふ。元祿以後の有名なる國學者は、多く此派の歌人なるがなかに、僧契仲、加茂眞淵、本居宣長、村田春海、加藤千蔭等最も有名にして、皆短歌のみならず長歌にも巧なりき。ことに眞淵の長歌は、萬葉の骨髓を得て、人丸、赤人の高調に亞ぐと稱せらる。其家集に縣居歌集、加茂翁家集あり。この二書と、契仲の漫吟集、宣長の鈴屋集、春海の琴後集、千蔭のうけらが花等との長短歌は、此派の歌を代表するものなり。  
 然るに、眞淵等の歌が強いて古語を弄するの弊あるを見て、専ら平易なる語を用ゐ、且つ「しらべ」即ち歌の聲調と其意味との調和を主

張したるものを、此時代の末に出でたる桂園派の短歌とす。桂園は香川景樹の家の名なり。門下に八田知紀、熊谷直好、穗井田忠友、渡忠秋等有名なる歌人多し。

景樹は因幡の人、荒木某の子にして、京都の歌人香川黃中の養子となり、從五位下肥後守に叙せられぬ。近く天保の末年に死したる人なれば、今日もなほ其門人の生存せる者あるべし。家集を桂園一枝と云ふ、其歌體の嶄新にして巧妙なること、殆んど新古今を凌ぐんとす。

其他、有賀長伯、富士谷成章、小澤蘆庵、網代弘訓、橘守部、蓮月尼等、亦頗る歌に名ありき。

倭文子をかなしめる歌

賀茂 眞淵

ちゝみの父にもあらずは、そばの母ならなくに泣く子なす、我を慕ひて、いつくし



み、思ひつる子は、初秋の露に匂へる。眞萩原、衣するどや、招くなる。尾花とふとや、鹿子  
 じもの、ひとり出でたち、うらぶれて、野邊にいにきと。聞きしより、日にけにまてと、う  
 つたへに、こども聞わす、父ならぬ、我どやとはぬ、母ならぬ、身とてやうとき、戀しきも  
 のを、「初風の、吹きうらかへす、秋の野の、葛の裏葉の、うらぶれて、いにしその子は、萩  
 見にと、行きやはしつる、霧わくと、まをひやはせし、現し身は、かなしきかもよ、歸り來  
 ん、道にすぎぬと、家人の、告げつるものを、わいらくは、ねほしきことを、ひたふるに、思  
 ふがまゝに、忘るべき、わざならぬをも、たつ霧の、まをひけらしな、まをひつゝ、あらば  
 あらまし、なにするとか、まさかを知りて、さら〜に、新喪のことも、嘆しぬらん。

反歌

萩が花見れば、かなしな、いにし人、歸らぬ野邊に、匂ふと思へば。  
 あらさする、新喪の秋は、立つ霧の、思ひ感ひて、過しだにせし。

思ふことをよめる歌

本居宣長

思ふこと、いはすや、まめや、もろこしの、からの心の、世の人は、聴かずともよし、今こそ  
 は、聴かずありなめ、大直日、神し、在ませば、眞心に、又もかへりて、ますぐにし、聴く世は  
 あらんを、思ふこと、心にこめて、いはすや、まめや。

正月の六日ばかり、よべの雪の名残見んとて、隅田川に舟を泛べて

村田春海

みをのぼる、隅田河原の、河舟も、行く方遠き、上つ瀬の堤を見れば、白雪に、なほ埋もれ  
 て、下草の、緑もわかず、立ちならぶ、木々の梢は、春の日を、はやく待ちわびて、うらくと、  
 けぶりそめたり、下つ瀬を、かへり見すれば、氷居し、葦邊の洲鳥、波の上に、友呼びかは  
 し、遠方トホや、霞の間より、夕虹のたつかとばかり、久方の、雲居に高く、かゝる長橋

反歌

消ぬせずは、明日もとひ來ん、隅田河、河遠白く、降れる沫雪。

立秋

下河邊長流

夏衣、うすきものとは、知らざりし、袂ればゆる、秋の初風。

題しらす

つひにわが、着てもかへらぬ、唐錦、たつ田や、なにの故さとの山。

深更歸雁

僧契仲

葦の葉の、別れも行くか、雁がねの、難波堀江の、まだ夜ふかきに。

遠村梅



はつせのや、里のうなるに、宿とへば、霞める梅の、たち枝をぞさす。

雁

霜かれの、伊勢の濱、荻枯れば、て、隈なき月に、雁を鳴くなる。

伊勢物語の中に、月やあらぬとよめるところの心を

月夜よし、梅咲きたりと、たれつけて、おれたる宿に、去年を戀ふらん。

題知らず

荷田春満

世にしげき、言の葉ぐさを、吹きわけて、家の風をも、つたへてしがな。

寄灯述懐

はかなしや、わが身ひとつの、窓の内も、てらしかねたる、夜半の灯火。

花

加茂真淵

うらくと、のどけき春の、心より、にはひいでたる、山櫻かな。

低月

にはせりの、かつじか早稲の、にひしぼり、くみつゝをれば、月かたふきぬ。

早秋

うきもの、思ひも入れで、秋風を、うらめづらしく、すぐすころかな。

述懐

たましく、に、人どある世を、憂き時は、そむかまほしく、思ふはかなさ。

嵐

信濃なる、すがのあら野に、飛ぶ鶯の、つばさもたわに、よく嵐かな。

曙落花

本居宣長

有明の、月はいそがぬ、真木の、戸に、雪ふき入る、花の春風。

我が肖像に題す

敷島の、やまととを、ろを、人とはい、朝日に、匂ふ、山ざくら花。

詠史二首

たもはさぬ、隠岐の、幸行イサナ、さくときは、賤の男われも、髪さかだつも。

わたのそこ、たきついくりに、まじりけん、君のまもりの、劔太刀はや。

題しらす

村田春海

をさまれる、御世の、守の、梓弓、ひきなゆるべと、ものゝ、ふの道。

山家暮春

日永さも、筋はれぬまゝに、知られけり、花より後の、春の山里。



杜鵑

ほととぎす、夜たゞなくねに、ならへども、物思ふ宿を、過ぎがてにする。

秋眺望

高圓の、野邊の、浮き霧、どだねして、尾花につゞく、松の、ひらだち。

富士山に雲の晴るゝを見て

心あてに、見し白雲は、ふもとにて、思はぬ空に、晴るゝ富士の根。

江春月

加藤千蔭

まゝの江や、玉藻かりけん、ねも影も、ほのかに、浮ぶ、春の夜の月。

春山

ねはかたの、霞は立ちも、及ばねど、春の光に、にはふ富士の根。

夏夜月明

みづねさす、葉ひろくまがし、露散りて、月ねもしろき、夜半にもあるかな。

江天暮雪

難波江は、暮れそめてなほ、雪の色に、夕とのかす、淡路嶋山。

花間鶯

香川景樹

惜しみても、なくとはすれど、鶯の聲のひまより、散る櫻かな。

河上花

大井川、かへらぬ水に、影見ぬて、ことしも、咲ける、山さくらかな。

螢火透簾

玉だれの、をすのひまより、それと見て、まかんとすれば、行く螢かな。

秋田風

おり立ちて、昨日か、摘みし、芹川の、竹田の原に、秋風ぞよく。

峯月照松

徒らに、思ひし、峯の、ひとつ松、こよひ月こそ、澄みのぼりけれ。

寒月

照る月の、影の、散りくる、心地して、夜行く、袖に、たまる雪かな。

小澤蘆庵、身まかりしとき、よみて遣はしける

親しきは、なさがあまたに、なりぬれど、惜しとは、君を、思ひけるかな。

紀貫之



うちわたす紀の遠山のなかりせば、明石の浦も、むなしからまし。

月前落花

八田知紀

ねぼつかな、朧月夜に、散る花の、行くへは、風も、知らずや、あゝらん。

業平朝臣

真心の、おどは、千世まで、残りけり、雪ふみわけし、小野の山里。

二、狂歌。狂歌も亦短歌の一體なり。古より歌人の遊戯として稀に行はれしかど、此時代の中頃より漸く流行して、化政<sup>文</sup>度に至りては、數多の名人輩出したるがなかに、蜀山人、六樹園最も名あり。蜀山人は姓名を太田覃と云ひ、又、四方赤良、南畝等の號あり。江戸の士なり。頗る和漢の學に通じ、好んで滑稽諷諷の間に放浪す、蓋し一代の奇士なり。其狂歌の妙、古今無比と稱せらる。千紫萬紅蜀山百首は其歌集なり。六樹園は、有名なる辭書、雅言集覽の著者、石川望の號なり。其狂名を又宿屋飯盛といふ、もと江戸の旅館の主人なりけれ

はなり。雅文にも巧なりしが、狂歌は其最も長ずるところなり。

蜀山人

生酔の、禮者を見れば、大道を、横すぢかひに、春は來にけり。

一面の、花は、碁盤の、上野山、黒門前に、かゝる白雲。

杜鵑鳴さつる跡に、あされたる、後徳大寺の、有明の顔。

今更に、何か惜しまん、神武より、二千年來、暮れて行く年。

宿屋飯盛

歌よみは、下手こそよけれ、天地の、動き出しては、たまるものは。

三、俳諧、發句。俳諧とは「俳諧の連歌」の略稱にして、通俗なる言語を以て作りたる連歌の義なり。發句とは、連歌中の最初の一句を稱する名なりしが、後、其最初の句のみを作ること流行して、これをも發句或は俳句と稱するに至りぬ。

抑、室町時代に流行したる連歌は、なほ多く古語を用ゐるものなり



しを、彼の時代の末に、山崎宗鑑、荒木田守武等俳諧を創めて、専ら俗語を用ゐしものは、此時代に至りては、一般の通俗文學とともに大に流行して、松永貞徳の貞門、西山宗因の檀林、松尾芭蕉の蕉風等、前後並び起こりしが、終に芭蕉の天才に壓倒せられて、元祿以後は蕉風獨り盛なりき。

蓋し、俳諧及び發句は、其簡勁の妙まゝ、敬服すべきものに乏しからずと雖も、専ら變化を主とせる俳諧、或は僅らに十七字より成れる發句に、絶大の詩想を寓し得ざることは、最も見易きことなれば、これ等の文學其ものゝ價值よりは、寧ろ其流行が、中流以下の社會に文學創作の趣味を傳播したる功こそ、最も注意すべきことなれ。此時代には種々なる通俗文學流行したれど、其作者を廣く下層社會に有せりしものは、たゞ俳諧と發句とのみ。

其作者の有名なるものは、貞徳、宗因、芭蕉の外に、其角、嵐雪、去來、支考、許六、蕪村、蓼太、一茶等極めて多けれど、就中、芭蕉は古今獨歩の名あり。

芭蕉は、初の名を松尾半七郎宗房と云ふ、伊賀の士なり。京都に出で、北村季吟の門に學び、貞門及び檀林の俳諧を弄びしが、貞亨の頃遂に一家の風を創む。其學、略和漢に通じ、最も老莊が虚無の説を好みて、閑寂なる自然に對することを以て至樂となせしものは、其詠する所、最も閑寂幽玄の趣味に富めり。されど、其門下なる蕉風の俳人は、必ずしも其趣味にのみ固着せず、各其特長を發揮せしむれば、或は華美なるあり、奇警なるあり、滑稽なるあり、其趣味決して一ならず。而して其滑稽に專なりしものは、後に一轉して、川柳、狂句等となりぬ。







さしぬきを、足でぬぐ夜や、朧月。

谷口蕪村

春の海、ひねもすのたり、く哉。

全

眼をあけば、晝寝なりけり、蟬の聲。

大島蓼太

それでこそ、御杜鵑、松に月。

小林一茶

瘦せ蛙、まけるな。一茶これにあり。

全

四、俗謡。 催馬樂、今様等より起こりたる、通俗なる謡ひ物を俗謡といふ。前時代の末、永祿の頃、三味線と云ふ樂器の渡來とともに漸く流行して、此時代に至りて最も盛なりき。其作、野卑淫靡なるもの多けれども、まゝ誦すべきものなきに非ず。其歌體は、多く七五の句の間に、七七の句を混じたるものにして、頗る聲調の變化に富めり。又俗謡には、其歌體の長短、曲節等によりて、小唄、端唄、長唄等の名稱あり。

渡りくらべて、世の中見れば、阿波の鳴戸に、浪もなし。……小唄

花に置く露、小笹の霰、こぼれやすきは、わが涙。……小唄

よしやわさくれ、身は朝顔の、日影まつまの、花の色、恨みられしも、恨みし人も、ともに消え行く、野邊の露。……端歌節の唄

名に高き、高雄の山に、葉を染めし、木々の詠の、いくしはや、霧立ちのぼる、山の端に、夜の錦の色、ふかく、紅葉踏みわけ、ういよと鹿の鹿の、鳴く音に、旅寝の床の、秋の嵐の、身にしみとくと、笥の水の、香づれを、聞けば、心も、清瀧の、流に、すめる、後の月。……長唄

五、淨瑠璃。 室町時代の末に、平家物語、諸曲等に倣ひて、牛若丸と淨瑠璃姫の情事を記したる、淨瑠璃物語出でたり、これ淨瑠璃の始なり。此物語は、なほ散文に近きものなりしが、爾來種々の變遷を経て、元祿の頃に至りては、其會話の文を除けば、總て七五或は七七の調をなすに至り、而して、近世第一の文學者たる近松門左衛門、又其作者としてあらはれしものは、淨瑠璃は實に、我國の最も發達したる律語となりぬ。其趣向は、小説或は物語の如く、總て假想に成れるも



のにして、材を過去に取れるものを時代物と云ひ、現在に取れるものを世話物と云ふ。故に人情に切なるものは、世話物に多けれども、變化に富めるものは、時代物に多しとす。

有名なる浄瑠璃は、多く門左衛門の作にして、時代物には、曾我會稽山、國姓爺合戦、雪女五枚羽子板、世話物には、心中天の網島、女殺油地獄、鎗の權三重帷子、心中宵庚申等は、特に傑作と稱せらる。其他、竹田出雲の假名手本忠臣藏、菅原傳授手習鑑、紀海音の八百屋於七歌祭文、近松半二の關取千兩幟等亦著名なり。

門左衛門は長門萩の士にして、初の名を杉森信盛といふ、幼にして肥前唐津の近松寺に入りて僧となり、一たび某寺の住職となりしが、後還俗して京都の一條家に仕へ、從六位に叙せられ、居ること數年、又去りて大阪に行き、姓名を改めて近松門左衛門と稱し、専ら浄

瑠璃の著作に従事しぬ。其靈心妙腕能く人情の機微に入り、其描くところの貴賤男女、皆紙上に躍出せんとす。蓋し天下の至文なり。

女殺油地獄の一節

近松門左衛門

〔正畧〕……何を匿くしませう、跡の月の二十日に、親仁の謀判して、上銀二百匁、今晚限（ト）に借りました、ヤ、ま跡を聞いて下され、手券（ト）の表は上銀壹貫目、借りた金は二百匁、明日になれば手券の通壹貫匁で返す約束、夫より悲いは、親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ、先様からことばは、等、今に成つて此金の才覺、泣いても笑うても叶はぬこと、自害して死なうと覺悟し、これ懐に此脇差、さしは差いて出たれども、只今兩親の歎き、御不便がりを聞いては、死で此金、親仁の難儀に掛ること、不孝のぬり上げ、身上の破滅、思ひ廻せば死ぬるにも死なれず、生ては居れず、詮方なきに見掛ての御無心ぞや、無ければ是非もなし、有る金たつた二百匁で、與兵衛が命を繼いで下さる御恩徳、冥途の底まで忘れうか、お吉様どうぞ貸して下されど、いふ目の色も、誠らしく、そうした事もと思ひながら、兼ての偽り、是も亦其手よと思ひ返して、フツ、まがくしいあの虚言はいの、まだ尾鰭付けていはしやんせ、ならぬと云うては、きつうならぬ、是程男の名利に掛け、誓言立てるも成りませぬか、ハア、はあ何とせ



う借りますまい」といふより心の一分別「そんなら此樽に油二升取替へて下さりませ」夫は互の商ひ内貸借せいで世がたゝぬ成る程つめて「ど賣場にかゝり消ゆる命の燈火は油量るも夢の間と知らず、知らずで升取り柄杓取る背後に與兵衛が邪見の刀抜いて待つとも見ず知らず、祝うて節句も御仕舞ひなされ、良人ども割り入つて相談有る金なれば役に立てまい物でなし、五十年六十年の夫婦の中も、儘にならぬは女のならひ、必ず我を怨んでばし下さるな」といふ内に、燈火に映る刀の光、お吉びつくり、今のは何ぞ、與兵衛様「イヤ、何でも御座らぬ」と、脇差背後に押隠す、それを、屹度目もすはつて、なう恐ろしい顔色、其右の手爰へ出さしやんせ、おつと脇差持ちかへて、「是見さしやれ、何も無い」と云へ、共お吉身もわなく、ア、こな様は小氣味の悪い、必ず傍へ寄るまい」と、跡退りして寄る門の口、明けて逃げんと氣を配れど、「ハテ、さよろさよろ、何おそろしい」と、付け廻しく、出合へどわめく一聲、二聲待たず飛懸かり、取て引絞め、音ばね立つるな、女め」と、喉笛の鎖をぐつと刺す、刺されて惱亂手足をもがき、そんなら聲立てまい、今死んでは年はもいかぬ三人の子が流浪する、それが可愛い、死にとも無い、金も入る程持つて御座れ、助けて下され、與兵衛様「オ、死に共ない筈、尤も、こなたの娘が可愛い程、己も己を可愛いがる親仁がいとしい、金拂

うて男立てねばならぬ、諦らめて死んで下され、口で申せば人が聞く、心でお念佛、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と引き寄せて、右手より左手のふと腹へ、刺してはるぐり抜いては切る、お吉を迎ひの冥土の夜風はためく門の轆の音、あれちに賣場の火も消えて、庭も心も暗闇に、打まく油流るゝ、血踏のめらかし踏すべり、身内は血潮のあかづら赤鬼、邪見の角を振り立て、お吉が身をさく、劔の山、目前油の地獄の苦痛、軒の菖蒲のさしもげに、千々の病はよくれ、共過去の業病遁れぬ、菖蒲刀に置く露の、たまも亂れて息絶ゐたり、日比の強き死顔見て、どつと我から心もおくれ、膝節がたたく、がたつく胸を押しさげ、さげたる鍵を追つ取つて、窺けば蚊帳のうちとけて、寝たる子供の顔付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがらつく鍵の音、頭の上に鳴雷の落ちかゝるかと肝にこたへ、戸棚にひつたり、引出す財囊、上銀五百八十匁、宵に聞いたる心當、ねぢ込込ねぢ込込、このころの、重さよ足もおもく、来て、薄氷を履む、火焙踏む、此脇差はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見ぬ沙汰、此世の果報の付け時と、内をぬけ出で、一さんに、足に任せて……………

曾我虎が磨の一節

近松門左衛門

(上畧)向うのねがたせうくと、俄に瀧の落るが如く、荳原笹原、辻風起る其響き、幾年



功經る猪の猪矢四五本負ひながら、真下りに落せしは、牛鬼なんせも謂つべし。父の祐經、大勢引具し聲をかけ、矢先にては適ふまじ、大石枯木と投げかけ、縮めて獲れやと下知をなし、八方より取巻て、木の枝土壞手頃の石、雨の如くに投げかくる。猪は怒つて猛りをかき、牙を研ぎ鼻嵐を吹き掛け、寄すればバツと退き、退けば續いてかゝり、追つ返しつ揉合ひしが、飛蒐つて雑兵二人、左右の牙に引かけ、二三間ひらりと投げ、人穴さして飛び入りしは、凄じかりける猛勢なり。祐經穴を差覗き、あれ〜中にて吼る聲、未だ奥まで行つかず、取つて返すは必定。穴の口に鍵先揃へ突止めよ、承ると立ち並び、今や〜と待つ所に、内より土風土煙、半臂に弓籠手狩袴、大太刀佩いたる武士の猪の胴骨馬乗に、頭を背後、尾筒を手綱に乗せながら、迂鳴り出でたる暴猪の鍵も矢先も事どもせず、寄り付くものを駈り散らし、山を崩し立木を折り、乗手は落ちじと締付れば、猪は落さん〜と谷に駈り尾上に飛び、真なご混りの砂利土に、足をつぱと踏込んで、怯む處を指添抜き、既に突かんと振り上ぐれば、祐經聲をかけ、ヤアヤア猪に乗たるは、新田の四郎忠常なもど其猪は此祐經が、人穴へ追ひ込むだり。然れば手柄は二人の手柄假へ御邊が突き止めても、先の手柄は祐經を、後日に前後を争ふな。其爲詞を番ふたど、いはせも果てず、いや是れ、前後の争ひはいざ知ら

ず、……………」……………」われ小藤太、突き留めて奪ひ取れ、心得たりと寄るところを、猪は四つ足をぐつと抜き、小藤太が左の高股、膝節かけてさらりとかけ、仁田を其まゝ、乗せながら、崖も岨も嫌ひなく、岩を蹴割つて飛んで行く。

### 散文

此時代の散文は、其種類極めて雑多にして、等しく隨筆にして、雅文なるあり、和漢混合文なるあり。等しく小説にして、平安朝の物語に似たるあり、或は戦記文に似たるあり、或は通俗文なるあり。同種類の著書も、其文體相異なるもの多きが故に、今は専ら其文體より區別して、和漢混合文、雅文、通俗文の三種として論せん。

一、和漢混合文。和文、漢文ともに俗耳に入り易からず、通俗文は疎野に過ぎたり。されば初期以來の漢學者は、文教の普及を圖りて、一種の文體を創めぬ。そは前代の戦記文、隨筆等に似て、一層漢文の



分量を多くしたるものにして、所謂和漢混合文なり。初期以來の漢學者、多少此種の文を草せざるもの尠なきがなかに、新井白石、貝原益軒、室鳩巢等の文、最も名あり。新井白石、名は君美、白石は其號なり、幼にして穎悟、長ずるに及びて大志あり、文學を以て家を成さんことを期し、當時の鴻儒、木下順庵の門に入りて精勵刻苦、遂に博覽卓識を以て聞ゆ。六代將軍家宣、未だ甲府の藩邸に在りし時、召されて儒官となり、命を奉じて、慶長五年より延寶八年に至るまで八十餘年間、三百三十七諸侯の家譜を撰びぬ。和漢混合文の粹と稱せらるゝ、藩翰譜即ちこれなり。後、家宣將軍の統を繼ぐに及びて、又召されて幕府に仕へ、功を以て從五位下筑後守に叙任し、俸祿千石を賜ひき。將軍薨じて、其畫策するところ多く用ゐられざりしをば、乃ち職を辭して閑居し、専ら著述に從

事しぬ。著書三百餘種の中、其文章を以て有名なるものは、藩翰譜の外に、自叙傳、折たく柴の記、及び史論、讀史餘論等あり。白石の文は、能く和文の婉麗と、漢文の遒勁とを併せて、佶偲に陥らず、纖弱に流れず、實に縱横自在の妙を極む。蓋し文を學ぶものゝ好模範なり。貝原益軒は又損軒と號す、名は篤信、福岡の藩士なり。人となり恭謙、學を好み、學問洽博、著書百餘種あり。皆平易なる和漢混合文を用ゐ、婦女童幼すらなほこれを解することを得しむ、其文流暢にして謹嚴、自ら一家の風を成せり。家道訓、養生訓、樂訓、童子訓、初學訓、大和俗訓、女大學、慎思錄等の著書、最も世に行はる。室鳩巢は名を直清といひ、木下順庵の弟子にして、白石の學友なり。白石の推薦によりて幕府の儒官となり、江戸駿河臺に住せしむば、世人呼んで駿臺先生といひぬ。其著駿臺雜話、鳩巢小説最も著名な



り。其文章は白石と伯仲の間に在り。

其他此文體を用ゐたる著書の有名なるものには、熊澤蕃山の集義和書、集義外書、雨森芳洲の多波禮草、伊藤東涯の秉燭談、輜軒小錄、荻生徂徠の護園餘談、南留別志、太宰春臺の經濟錄、獨語、柳澤淇園の雲萍雜誌等、皆藩翰譜、駿臺雜誌等と相前後して出で、やゝ降りては、湯淺元禎の常山記談、太田錦城の梧窓漫筆、橘南谿の東西遊記、藤田東湖の常陸帶等あり。是等は皆漢學者の餘業に成れるものなるが、又國學者、小説家等の著書にも、此文體を用ゐたるものあり。伴蒿蹊が近世畸人傳、閑田耕筆、瀧澤馬琴が燕石雜誌、玄同放言の類これなり。

本多重次の奇計 (藩翰譜)

關白殿、いかにもして、徳川殿と親しうならんと、いろいろに謀をめぐらし、やがてまた、其妹君を徳川殿の北の方に参らせられしかば、徳川殿、此上は見参なくて叶ふまじとて、御上洛あるべきに極る。御家人等が危く思はん所も侍る故、都に御逗留あら

ん程は、それに留めさせたまふべしとて、大廳を下し給ひしかば、岡崎の城に入れまゐらせ、重次これを守る。井伊、大久保も、同じく御後にとゞまる。

此時、重次下知して、大廳のおはしますはどりに、薪を積むこと山の如し。こはそも如何なる事ぞと驚き、大政所の御供せし女房たちは、した女して、薪つひ下男一人まねぎ、酒など吞ませ心能くとりて、さて何事にか、この程日々にか、薪をば積む事ぞと問へば、いかなる事ども、下郎は如何で知り申さむ。たゞし承る所は、關白殿の、我國の殿を失ひたまふか、若くは留めまゐらせて、返したまはずば、今度都より御下りありて、是にまします御方を、盡く焼殺し申さん料の薪とかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より切りて來り候ふが、この本多殿と申すは、極めて氣の短き人にて、殿の御歸りおそしおそしと待ちかねて、けさ火を附けら、晩に焼きたてうと、せられ候ふを、井伊殿や、大久保殿が、しばしと制したまへばこそ、今まではかくて候へ。痛はしや、美しき都上臈の、今のうちにも、灰土にならせたまはんことの無慚さよと、下郎等は申す事にて候ふといひしを、女房達にかくといへば、あな悲しや、その本多といふ男が、日々に参りて、おそろしげなるこわねにて、家康より茲につけ参らせて候ふ御用の事あらば、承りなんすといふを、今思ひ合すれば、参河守殿の、初めて御参



ありし時、仙千代方といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、あれは家康がうちにて、三奉行といふうちの、鬼作左衛門といふものゝ子なりと仰せありしかば、おそろしく、鬼も子を生むにや、鬼の子は如何なる者にやとて、物越に人々の見たりしに、其親の鬼ならばさこそあらめ、さればこそ、これへ参る度毎に、家康返り候はんと、の事は、いまだ御沙汰も聞ね候はぬやと、おどゝいひしぞ、けさもいひしぞ、待遠にや思ふらん、あはれ家康とくしてかへさせたまへかし、どなきくどきて、此由を大廳へ申しければ、大に驚きなげきたまひて、日々に御消息ありて、徳川殿をどくかへさせたまへ、こなたのありさまのいふせき、いつの世にかは忘るべきなど、ありし事どもこまゝと仰せ遣はされし程に、ほどなく御歸國ましまし、大廳歸りのぼらせ給ひければ、女房たち涙を流し、なさけなくも御母上を下したまひしものかな。鬼本多とかやが、かくこそいふたれ、どこそ計らうてさむらひつれ。今は朝日の姫君をまゐらせたまへば、徳川殿の御ためにも、大廳は御母上にも候ふを、如何に鬼なればとて、己が主の事知らぬことや候ふべき、それにかく幸き目を見せ参らせて侍れば、はやはや徳川殿に仰せられて、如何なる罪にもおはせて、大廳の御恨をも晴らさせたまへど、どりゝに訴へければ、關白殿笑はせ給ひて、家康はよき者どもあまた召し仕

ひけり、秀吉もその如き家人をば、ほしき事に候ふぞや、とばかりのたまひて、御座をたゝせたまひしとなり。

池田輝政父子の敗軍 (藩翰譜)

秀吉また北畠殿をうしなひ奉らんとせしとき、信輝が父子、秀吉が方人して、まづ手合に、犬山の城を攻めおとす。徳川殿は北畠殿を助けて、清洲の城に至りたまひ、天正十二年三月十七日、御方の人々まづ森武藏守長一が羽黒の陣を打ち破つて、秀吉の多勢にむかひ、小牧の山に陣をとる。同じき四月四日、勝入、秀吉の陣に行き向つて、徳川が勢日々に馳せあつまるどみゐて、小牧のかたき多勢になつて候。今は家康が國々に残る勢多からじ、まづ三河國をおそひ取て候はんに、は、一定小牧のかたきも破れつべう、おぼえ候といふ。秀吉よくはかつてこそ答ふべけれど、入道を返さる。明れば五日の朝、入道また來りて、家康、篠木、柏木の郷人等を催し、彼はどりに要害かまへて、軍勢こむべしと承る。道のはどふさがらぬうちに、三河の國に向は、いやといひしかば、秀吉甥の三好孫七郎を大將とし、池田森が勢と同じく、三河國を襲はんとす。三好も森も入道が聲なれば、かさねて軍の檢使をこゝ、堀久太郎秀政を加へらる。同じき六日の夜半より打ちたつ。秀吉もやがて犬山をたつて、樂田に陣を移さる。同じ



き九日のあした、入道岩崎の城せめおとし、心よげに首をも實檢して居たるに、後陣にうつたる大將三好が一萬騎、徳川殿の先陣にうちやぶられ、散々になつてにげ來る。堀久太郎秀政追ひ來るかたきをまぢかけて、武つさきに切つてかゝる、森も池田も續いてかゝる。徳川殿に出であうて、堀が軍勢たちまちにみだれたつて、武藏守長一すでにうたれ、池田が勢もやぶれしかば、信輝入道馬うしなつてかちだちになり、堀が勢と一處にならんとす。其間はるかにへだゝりぬ、かたきは間近かく追ひつめたり。これまでとや思ひけん、胡床に坐してかたきをまつ。永井傳八郎直勝おちわひて首をとる。年つもつて四十九歳、嫡子紀伊守之助生年廿六、安藤彦四郎直次がために討たれてけり。

輝政手の兵散々にうちなされ、信輝守之助うたるゝとき、一處にこそ討死すべけれど、取つてかへす。輝政の家人伴大膳其頃いまだ腕の舍人なりけるが、たゞ一人追ひつきて馬の口にすがり、引かへして一鞭あつ。輝政いかつて、あつばれ不覺の奴かなと云ふまゝに、鎧の鼻にてかうべくだけよと蹴たりける。蹴られてちつともひるまず、やあ若殿こそ不覺なれとて、片手に轡をしつかと執つて、片手は鞭をわて、はす。馬はさすがに逸物なり、鞭はしきりにあてられぬ。飛ぶがとどくにはせゆけば、

輝政腹にすねかねて、つゞけさまに蹴りしほどに、かうべことく蹴かゝれて、ながるゝ血、遍身紅に染まれども、なほ放ちやらざれば、力及ばずして引退く。

樂訓の一節

具原益軒

春たちしより、年の暮れ行くまで、いるが如くにおもはゆれど、時日の早く過ぎゆくは止めあへず。うべもどしど名づけ、又どきといへるならん。されば光陰箭の如く、時節流るゝが如しといへるも、うける事にあらず。老にむかへば猶さらば、年月の早く過ぐる事、あだかも飛ぶが如し。あどをかへりみれば、いそぢのよはひを過ぎこしも、さのみ久しからず。たどひいそぢの後、又いそぢ齡を経て、百とせにいたるとも、なほ行くさきの月日、いよゝ早くして、程なくつきなん事、思ひやられ侍り。幾程なき残れる齡を、たのしみてこそ過ぐさまはしけれ。うれへくるしみて、空しく過ぎなんば、いとおろかなりや。年々に花は相似たれど、としゝに人は同じからず。老かさなれば、一年の内にも、やうやく衰へゆきて、今の昔にしかず。後の今にしかざることを知りて、かねてより悔なからんことを思ひ、時日を惜み、一日も徒に過ぐべからず。けふ暮れて、明日もありとてたのむべからず。けふの日のうちを日々には惜むべし。

仁の説 (駿臺雜話)

室鳩巢



ある時例の人々どぶらひ來て講習しけるが、仁義の説に及べり、中にひとりいひけるは、人は天地の心を得て心とす、天地は萬物を生ずるを以て心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するを以て心の徳とする事勿論なり。よりにて仁は心之徳、愛之理といへり、心の徳とあれば、仁義禮智諸共に仁に漏るゝ事なき程に、仁は四者を含みて義も禮智も仁によりて立つなり。是れは翁の講説にてかねて承りし事にて侍る。但し仁は人を愛する心にあらずや、それを衆善の長とすること、たれも知りたるやうに候へども、大かたは、人はたゞ慈悲を第一とすることを以て、仁を衆善の長とするとばかり心得侍る。それは慈悲の重き事をいはい、じかいうてもやみなまし。今仁を心の徳とするは、さやうの一通りの淺き事にてはあるまじく候。いかなれば、慈悲の心ひとつが心の徳となりて、義も禮も智も仁なければうせはるふるにやあらんと工夫すべき事にて侍る。このところを今少し承りたくこそ候へ。翁聞きて、只今申さるゝ所すこしもちがひなく聞侍る。されば日頃申したる外に、改めて申すべき事もなく候へども、猶更委しく申し候は、心の仁あるは人の元氣あるが如し。人の元氣は脈にあらはれ、心の元氣は愛にあらはる。脈のかよひ絶ゆれば人死する如く、愛の理はるふれば心死する程に、仁は心のいのもとも申すべし。夫れ心は活物

なるにより、人に情あり、物の哀を知りて、常にいきたる物がかし。よりにて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞きては必ず感ずる事をしり、不義を聞きては必ず耻づることを知る。もし情なく、愛を知らずば、其心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなり。何をもちて自愛し、何をもちて恭敬せん。義を聞きて感ずる事なく、不義を聞きても耻づる事なかるべし。是をもていふに、仁義禮智いづれも心の徳にして、各其理分るれども、其本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も禮も智も其さまあり、其用ありといへども、所詮内より生せねば、眞の徳にあらず。公の理にあらず。この故に、仁に心の徳といひて、外に徳をいはず。仁に愛の理といひて、外に理をいはず。そのいはざる所に、ふかき意ありとしるべし。

親不知の險 (東西遊記)

橋 南 谿

越中越後の堺に、親不知子不知といふ所あり。北陸道第一の難所として、普く人の知る所なり。越中立山の裾、北海へ張り出でたる所にて、市振といふ驛より、歌村といふ所までを、山の下と稱して、二里半あり。立山の裾なる故に、斷崖絶壁にて、路徑も付け



がたき故に、波打際を旅人通行する事なり。一方は壁を立てたる如き山、一方は大海なり。風なく波静なる日は、旅人通行する道、幅七八間或は十間斗りあり。又所によりて、半丁一丁もある所あり。然るに風起り波荒き時は、直に彼絶壁の所へ波打かけて、通路なし。右二里半のうちに一ヶ所、長さ五六町の間、別に道幅狭き所あるを、世に親不知子不知といふ。甚だ難所にして、親も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其間絶壁の根に岩穴ありて、十間程づゝ置きて、其穴いくつもあり。波の打よする時は、通行の人此穴へ走り入りて、波の引く時を見合せて走り過ぎ、又波來れば、次の穴に入りて是れを避く。もし北風強きときは、數日を歴るといへども通行ならずとなり。去々年も、越後の商人越中に越ゆるとて、此所を無理に通るかゝり、中程にて波風殊に強くなり、作の穴に逃げ入りたるに、穴際まで大波打かけて、走り過ぐべき隙なく、八日が間其穴の中に居、やうやう波風静まり、命たすかり、其穴を出たり。其間の餓渴心遣ひ、言ふに詞なしと語れり。波高き日、無理に通るかゝり、穴中に避け隠れて出づべき隙なく、二日三日穴に居る人は、年々多き事とす。余が通行せし時は雨天にて、波風はさのみ強からざりしかども、上の山は傾くが如く聳々、寄せ來る波は、足を引き去れば、其恐ろしき事今に忘れず。余が友富山の佐伯某、此所を

通りしに、其身は肩輿に乗り居しが、人足二三十人にて其肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴へ隠れ、走りぬけては穴に隠れて、やう／＼に過ぎたりと語れり。總じて此邊の人足は、浪を避けて走ること、に妙を得たり。されば此地の人夫大勢を召連れ行く時は、大抵の浪風には、滞ることなしといへり。扱此親不知を過ぎて、少し山のふと、ころに人家ある所を歌村といふ。其村を過ぎ、又波打際を行けば、駒返りと云ふ難所あり。此所は、波風無き時といへども、常に山の根へ波打かけ、通路なりがたきゆゑに、絶壁の中半に、岩を穿ちて細き道を付け、旅人通行す。其間纒の所なれども、馬上なりがたき故に、駒返りと名付く。馬は兩方の驛より來り、荷物は其纒の所を、人夫にて返り越すことなり。歌村より一里半にして、青海といふ驛あり。此所は山下を通りぬけて、少し廣みなり。市振より青海まで四里の所難所なり。風波の時は、王侯の勢にても越ゆることなり難し。誠に一人是を守れば、萬夫も過ぐることをあたはざる要害の地なり。故に市振は御領所にて、關あり。往來の人を改む。余醫者にて總髮なる故に、別して町噺に吟味ありき。誠に左もあるべし。他所と違ひ、一方は大海、一方は萬仞の高山。南の方へ數十里連り聳々たれば、廻りても通るべき道なし。天險とはかゝる所といふべし。かはせの難所なれども、夏の頃、天氣格別晴朗にして、風波静なる日は、道路



に少しの高低もなく、絲を引きたる如き波打際なみの事なれば難所とも知らず、只風景のよき所とのみ思ひて、通行する人多しとなり。

二、雅文。附古文學註釋書。元祿の頃より、古文學の研究盛に起こりしかば、古文學に模倣したる歌文亦従つて起こりぬ。其歌は萬葉派の長短歌にして、其文は即ち雅文なり。

此時代の國學者には、古學復興の祖として、僧契仲、下河邊長流、荷田春滿カネミツあり。春滿の門に加茂眞淵あり。其門下に本居宣長、村田春海、加藤千蔭、塙保己一等あり。宣長の子に春庭、門人に平田篤胤、藤井高尙あり。春海の門に清水濱臣、高田與清あり。保己一の門に屋代弘賢あり。皆所謂復古派の名家なり。其他、北村季吟、伴蒿蹊、富士谷成章、その子御杖、橘守部、足代弘訓、伊勢貞丈等は、此派以外に在りて、皆一方の大家と稱せらる。就中眞淵、宣長、春海、千蔭、濱臣、高尙、蒿蹊等、最も雅文

に名あり。其他の人々も、皆多少雅文を能くせしこと勿論なれど、元來此時代の國學者には、歌文を作ることよりは、古文學を研究することを以て、本務とせしもの多ければ、従つて、有名なる大家にも、古文學の註釋に専らにして、雅文の著書なきもの尠しとせず、而して其註釋の書には、學者の讀まざる可からざるもの極めて多し。今最も有名なる大家數人の略傳と、其著書とを記さん。

僧契仲、下河邊長流は、ともに難波に住し、夙に古學の研究に従事しぬ。初め、水戸光國、長流の古文學に精通せることを聞きて、萬葉集を註せしめしが、業を果さずして、貞亨中に没せしかば、契仲又命を受けてこれを完成しぬ。萬葉代匠記これなり。こゝに於て、世人が久しく解釋に苦みし萬葉集は、容易に理解せらるゝに至り、其雄大の調を慕ふもの、相繼ぎて起こりしかば、世人多く此書を以て古學復興



の始とす。契仲又古今餘材抄、勢語臆斷、源註拾遺等、數多の註釋書を著はしぬ。又其和歌の家集を、漫吟集と云ふ。元祿中難波の圓珠庵に没しぬ。

契仲より少しく後れて、古文の註釋につとめし人を、北村季吟とす。初め京都に住し、松永貞徳に従ひて、和歌、俳諧を學び、俳諧にも有名にして、俳書の著頗る多く、松尾芭蕉も其門に出でたり。元祿中幕府に召されて、和歌所に補せられ、子孫長く國文を以て家を成しぬ。源氏物語の註釋、湖月抄、枕草紙の春曙抄、徒然草の文段抄等、最も名あり。其他、八代集抄、土佐日記抄、萬葉拾穗抄、伊勢物語拾穗抄、和漢朗詠集註等、皆考證該博、用意周到、後學者を益すること極めて大なり。荷田春滿は京都稻荷神社の宮司にして、契仲につぎて古學復興に志し、嘗て國學の學校を設立せんとして、其計畫略成れりしが、果さ

ずして没しぬ。學問深遠にして氣慨あり。著書の草稿多かりしかど、死に臨みて、其説の未熟なるを耻ぢて、焼き棄てしとぞ。故に今世の傳ふるところ、僅々數部の寫本あるのみ。

加茂眞淵は、遠江の神官の子なり。春滿の門に入りて古學を研究し、寛保年中出で、江戸に住しぬ。其家を縣居と號せしむば、其門下を縣居派と云ふ。古學の名家多く此派に出で、名聲天下に振ひき。最も和歌及び雅文に長ず。著はす所、萬葉考、古今集打聞、神樂催馬樂考、冠辭考等、古文の註釋頗る多し。其雅文は加茂翁家集にあり。本居宣長は、鈴の屋と號す。伊勢松坂の人なり。初め醫を學びしが、後古學に志して眞淵の門人となりぬ。古事記の註釋古事記傳は、其畢生の大著述にして、歴史家、文學者の至寶なり。其他萬葉集玉の小琴、古今集遠鏡、新古今集、美濃家苞、源氏物語玉小櫛等、精確なる註釋書



の著甚た多く、其文章の見るべきものには、鈴屋集、玉勝間等あり。世人東満、眞淵とともに國學の三大人と稱す。蓋し其博學卓識は、三大人中の隨一なるべく、其筆力の縱横銳利なることは、白石と衡を争ふに足る。實に近世の偉人なり。宣長又初めて國語の文法を研究して、詞の玉緒、紐鏡を作る。嗣子春庭、富士谷成章等、これを祖述して、詞の八衢、あゆひ抄、かさし抄等を著はし、以て今日の文法書の基を成しぬ。

村田春海と、加藤千蔭とは、ともに江戸に生れ、縣居門の文豪として、名を等しうしたる人なり。春海は漢文の素養あり、故に其文、秩然として法あり。世或は眞淵に優ると稱す。其歌文の集を琴後集と云ふ。千蔭は又狂文、狂歌に長じ、其雅文も頗る輕妙飄逸の致あり。其家集をうけらが花といふ。千蔭又別に萬葉集略解を著はす。湖月抄、春曙

抄とともに頗る世に行はる。

上に挙げたる書どもの外に、此時代の雅文の見るべきものには、伴蒿蹊の閑田文筆、清水濱臣の泊々舍集、藤井高尙の松の舍文集、松の落葉、白川樂翁の花月草紙、上田秋成の雨月草紙等あり。又古來の雅文を編輯したるものに、水戸光國の撰扶桑拾葉集、及び高田與清が、水戸齊昭の命によりて撰びたる八洲文藻あり、而して、平田篤胤の著、古史傳、塙保己一の編纂したる正續群書類従は、純然たる文學の書にはあらねど、又國史家、國文學者の參考に資すべきものにして、有名なる大著述なり。

道行ぶりの一節

加茂 眞淵

今日は雲のまよひて、富士も見ぬす。原のすそわたりより、雨降りぬべし。明日こそ、渉るべき川の多きに、水層増さるも予する。夜をかけてだに、蒲原の宿まで、いかで行かんとて、夕方より、立ちまよふ雲とともに、いとぎつゝ、行くに、富士川、渉るはどに、空晴



れて、思はざるに、月さやかに出でにけり。

夜船漕ぐ、富士の河床、霧晴れて、高根に出づる、月を見る哉、掛川の宿わたり、ゆかりあるかた／＼音づれて過ぎぬ、夕つけて天龍川渉る、歌に天の中川と云ふよみて侍りし、人々迎へにとて来て、老人のことなきよしまづいひて、いとめづらしと思ひたるけしきどもに、いと嬉しくて、

まれに渉る、天の中川、なかく／＼に、嬉しき瀬にも、袖ぬらしけり。

加藤何某が家の柳の詞 (鈴屋文集)

本居宣長

もろこしの何某が、手づから植ゑて、名にさへ負ひける五もとの陰は、いかにありけん。加藤氏の屋戸なる柳よ、たゞ一本生ひ立てる、本だちもよろしきほどにて、こなたかなたさしおほひ廣がりたる枝々なん、物にも似ず、いみじく長く、庭の眞砂を掃らふばかりにうちしだりたる、朝夕の露だに散らで、吹くとしもなき風にしも、たのれひとり知り顔に、かたより靡きて、ひらめきたる末葉の色など、いで知らぬ明暮の詠は、さらにもいはず、きぬ笠によそへし、から國の昔のためしさへ思ひわたされて、よりかけたる緑の網の、長く久しく榮ゑ行かん此影には、うま人はた出でなんかしと、ことぶきがてらん。

於蘭陀といふ國の學 (玉勝間)

本居宣長

近き年頃於蘭陀といふ國の學問をすることは、はじまりて、江戸など、其輩これかれあめり、或る人もはら其學をするが、いひける趣をきくに、於蘭陀は、其國人、物かへに、遠き國々をわまねく渡りあり、國なれば、其國の學問をすれば、遠き國々のやうを能く知る故に、漢學者の、彼の國に泥めること、のあしきこと知らるゝなり、天地の間、いづれの國も、各其國なれば、必ず一ひきに傾き泥むべきにあらざ、とやうに趣けいふゆゑ、そは、彼のもろこしにのみ泥めるよりは、まさりて、一わたりさること、は聞ゆれど、なほ皇國の萬の國に優れて尊きことをば知らざるにや、萬の國のことを知らば、皇國の優れたるほどは、自ら知るらんものを、なほ皇國尊きことを知らざるは、彼の泥めるをわろしとするからに、たゞ泥まぬをよしとして、又それに泥めるにこそならぬ。於蘭陀には、わらぬ世の常の學者にも、今は此類もあるなり。

八月十五日、芳宜園にて、曇る夜の月を見る記 村田春海

芳宜園の月のまぶさは、年ごとの契なれば、來てふにも似ぬ夜のさまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり、さるは降りくらしたる雨の名残、晴れ行かん雲もおほぬす、ましてさやけき光待ち出でんは、いと心もとなきを、更け行かばかくのみに



はあらじを、こよひは寝であかしてまし、なごいひつゝ、伊豫簾空しうかゝげて、空のみうちまもらるゝも、いとわりなしや。今宵は名に負ふ園生の花も、徒らに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみ、やうく聲そはり行くも、なほあかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

晴れ間なき、月をいかにと、いひくゝて、そらながめにや、今宵あかさん。かきくらす、雲間の影は、うどくとも、月まつ虫よ、せめて語らへ。

時雨るゝ、日ものへまかるとて、人の許へ鏡借りにやる書

關山近きあたりの、ことに世離れたる御住居なれば、冬立つけはひ物寂しう、人目も草もど思ひどり給ふらんをこそ、推し測りまゐらせ侍れ。やつかり、石山に契りたることありて、今日こゝまでまかであるりぬ。晝間過ぐる程より、空うち時雨れつゝ、今日立つ冬のことわりがはに、降り出でたるが、都をばあからさまに立ち出でつれば、さる心まうけだにせで侍ることうたてけれ。

我はたゞ、冬野にひろふ、落栗のみのなきことぞ、わびしかりける。どなんねばゆるを、此從者<sup>ボク</sup>にたうべらば、嬉しうこそ、立ち歸り來んふしは、必ず柴のどばを驚かしまゐらすべし。夕かけて、行く方遠ければ、言も盡し侍らでなん。

萬葉集佳調序

加藤 千 蔭

春山の花にふれては、文なき衣も、其香にそみ、秋野の萩を分けては、やつるゝ袖さへ、其色に匂へり。されば、上つ世の歌を、常に心にしめなば、降れる世に生れ出でたりとも、自ら其姿の移らざらめや。こゝに長春氏、知らぬ火の筑紫の海の八沙路を経て、この吾妻の遠の御津に渡り、ねもころにいにしへふり語らふついで、旅の宿の心なくさに、萬葉集のうちのすぐれたるを、長きも短きも選び出で、朝よひに目なれて、すなはにしてあつく、みやびにしてを、しき調<sup>シラベ</sup>を、學びなれたよりとせばやと、事はかりす。さはいへ、故郷に歸らん月日も、はと遠からねばとて、とく讀みはて、拾ひ出だせり。もれたらんは、後にもとてなん。さてかく拾ひ出でたるを見れば、さながら春秋の野山の錦にたちまじれるこゝちなんしける。故其はしに書きつく。

三、通俗文 和漢混合文が、漢學者に用ゐられ、雅文が國學者に用ゐられたる如く、通俗文は多く戯作者、俳人等に用ゐられたり。其文は多く俗語を混するが故に、野鄙の調あることを免かれずと雖も、實境の委曲を盡すことに於ては、遠く他の文體の右に在り。この文



體によりて成れる文章は、大別して三種となすことを得、小説、脚本、及び俳文、狂文の類これなり。

(い) 小説 初期より寛政の頃までに最も流行したるものは、浮世草紙、洒落本と稱する、淫靡なる短篇小説にして、其脚色は見るに足るものなけれども、單に其文章よりいへば、井原西鶴、江島其磧、八文字屋自笑等の名文家あり。ことに西鶴の文の如きは、其脚色の故を以て、直ちに棄つべきに非ざるなり。

井原西鶴は浪華の人なり。西山宗因の門に入りて俳諧を學びて其高弟たり。資性放縱にして、常に花柳の巷に出入しぬ。其傑作と稱せらるゝ一代男、一代女、五人女等は、其平生の見聞より成れるものにして、卑語滿楮、殆んど見るに堪へずと雖も、又、俗つれ、永代藏、胸筭用等、淫靡ならざる著なきに非ず。而して其文章に至りては、其筆

力の銳利なる、其觀察の燃犀なる、殆んど枕草紙を凌がんとす。近時元祿文學を云ふ者、必ず先づ近松、西鶴を推す、蓋し偶然に非ざるなり。

寛政年間、幕府猥褻なる小説の出版を禁ずるに及びて、これ等の小説、暫く跡を絶ちて、讀本又は草雙紙と稱する歴史小説、及び滑稽本と稱するもの専ら行はれしが、後其制漸く寛ぶに至りて、人情本と稱する卑猥なるもの、又行はれたり。これ等の小説は、洒落本等にして、其脚色大に進歩し、複雑なる長篇頗る多し。其作者の有名なるものは、草雙紙に柳亭種彦あり。讀本に山東京傳、曲亭馬琴あり。滑稽本に式亭三馬、十返舎一九あり。人情本に爲永春水あり。而して馬琴獨り其間に傑出せり。

曲亭馬琴は、瀧澤解が戯作の名なり。江戸に生れて旗下の士に歴仕



し、又醫學、經學を學びしが、皆成らず。後、山東京傳に寄寓して、小説に専心し、遂に近世第一の小説家となりぬ。著はすところ二百六十餘種中、南總里見八犬傳、椿説弓張月、夢想兵衛蝴蝶物語、三七全傳、南柯夢等最も有名なり。ことに八犬傳、弓張月等の構造の偉大なること、前後比なし。蓋し馬琴は、其文章も頗る縦横自在なれども、其構造の複雑にして、極めて變化に富み、而して統一に巧なることは、其絶大の名譽を得たる主因なり。

山東京傳は、姓名を岩瀬醒といふ。江戸の商家に生れ、専ら戯作を以て業となしぬ。著はすところ二百五十餘種、就中、稻妻表紙、本朝醉菩薩等最も著はる。柳亭種彦は、幕府の士にして、高田知久といふ。傍ら戯作に従事して、著はすところ諺紫田舎源氏以下九十餘種あり。二人の文、皆平易にして流麗、其名聲亦馬琴に亞ぐ。

式亭三馬は、江戸の人にして、菊池泰輔といひ、十返舎一九は、重田貞一といひ、駿河の人にして、出で、江戸に住しぬ。二人殆んど時を同じうして、文化文政の頃に出で、又ともに滑稽諷刺を以て鳴る。而して一九が道中膝栗毛は、三馬の浮世風呂、浮世床等よりも稍有名なれど、其眞の技量に至りては、三馬却つて一九の上に在るが如し。爲永春水は、姓名を佐々木貞高といふ。又江戸の人なり。此時代の末葉、淫靡風をなすに乗じて、古の洒落本の跡をつぎて、卑猥なる人情本を作りしかば、一時世間に喧傳せられて、梅暦等の書、廣く行はれしかど、其文は平凡、其想は陳腐、絶て取るべきなし。天保年中、風俗壞亂の故を以て、其著書の絶版を命ぜらる。

過ぎて善きは親の意見、悪しきは酒俗つれど

井原西鶴

新春の御吉慶、何方も御同前の中、今年正月が仕納の親仁にも、若うならしやりました



たど、定つた口上を、互に謂ひすて、通る、方々の御盃、飲ぬ様なれど、目出度申納むる所で押へられ、重ねて祝はれ、日頃解飲はといふさへ、はや理も聞かず、肩衣が臂に懸るやら、袴の腰が曲むやら、扇は那邊で遺したか、雪踏を踏替へ、溝に踏かぶり、禮にゆかいでも苦しからぬ所へ行きて、二三年前の御力落を吊ひ、善からぬ事のみ盡して、今朝の七ツに出で、夕の黄昏まで辿り歩き、跣足なる方に草履はきて、鼻紙まで失ひ、逆鬢になり、博奕に打ち老けたる體して、如鷲狸と歸り、正月早々から、醉覺の機嫌悪しく、冷水四五盃息急しく飲むと、あたりあいの枕引き寄せ、大肝して一日の醉狂夢にや見るらむ。然るに此親仁たる人は、格別の思入、常々子どもに言ひ含めらるゝは、我無常時到りて、臨終の時節急なる時には、言ふ事も難からむ、別の仔細なし、唯酒を禁めて、月忌命日の齋非時にも、固く酒盞の入りたる料理する事なく、家の内には、壺平皿の蓋も、盃に似たる物を置かず、門に禁酒の札を石に彫りて建つべし、此言遺より外なし。昨日も日暮小太夫が説教を聞けば、あれほど力も強く、利發なる小栗殿も、横山に盛殺され給ふ、何を見ても聞いても、己のいふ事に違ふ事はあらずと、されども兼好とやらいふ者が、若き者の諺に、下戸ならぬこそと、異なことを書いていひならはせぬ。未だ生きて居らば、公事をしてなりとも、只置かじと思へど、今は亡き

後の紀念の草紙、聞くさへ疎まし。此頃近所に酒宴があるやら、頭痛がしてと、響めらるゝ顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、身の毛よだちて嫌ながら、聴きたるが今金言となりて、よく聞入れたる験に、二番目に生れながら、確なる親の跡を踏まへ、俵の敷藏に積みて、金袋を擔げさせ、いふ事に槌のさくも、炮烙頭巾を被りて、異見たらしく、謂はれし親仁の御蔭、過分至極なり。兄に生れたる者は、世間からも、親の眼鏡に外れし者と、心ある人には鼻であいしらは、れ、交疎くなりゆけば、類をもつて集まる男、酒一杯飲めば、其日の榮耀之に過ぎずと、面々の務むべき事懈るのみならず、其心からの慰事、一つも良からぬ金、手を懐に入れて世を渡る才覺、種々恐ろしき事ども、現世後生どもに取り失ひ、たつた今の事、見るやうな。

墨田河に文吾船を逐ふ (八犬傳)

こゝは、武藏と下總の堺川とを名にしおふ、その水上は、迥なる秩父の山より流れ来て、未果しなき海となる、阪東一二の大河なるに、折しも降つゝきたる皐月雨に、水炭増して波高く、淺瀬は絶えてなきものから、岸に繋げる船もやあると、おなじ河原を、幾遍となくゆきつ戻りつせし程に、天ははかなくも明けはなれて、遙に聞ゆる人馬の足音塵埃を蹴立て、轟々たり、毛野、小文吾はこれを見て、追兵は既に近づきぬ、殺



脱て陸をや走らん又この河を渡さん歎とて思はず水際に立在みたり。浩る處に千住のかたより流に隨ふ柴船のこなたの岸を離るゝこと僅に一反ばかりにして、棹どりを惱みたりけるを毛野、小文吾は齊ヒトシうち見て、天の祐と手を抗アゲげて、やよ雲時クモトキまて、便船せんこなたへ寄せよと招イサげども、頭をふりて、漕カウぎてゆく、毛野は機ハばやく大きに怒りて、憑ヨむに聴かぬことやある。貸さずとも今借らんすと罵りながら、水際に添ツうて、一町ばかり追蒐ツれば、舟人はなほあざみ笑うて、棹とり收め、舳ウラを推立て漕カウぎひらかんとする程に、毛野は閃ヒラりと身を跳らして、一反許隔りたる舟へ、發ツ動と飛び入りたり。舟人これに駭オドロき怒りて、棹カウ擡取カキて撃たんとすると、物々しやと引外し、怯ヒヤむところを蹴キ仆して、足下に楚シと踏み居ユゑて、漕カウぎ戻カさんどて、舳ウラを推せども、箭ヤよりも早ハき出水の勢、進退自由ならざれば、思ふにも似ず推流されて、川下遠くなりまざるを、小文吾うち見て、雲時クモトキも得堪へず、諸肌袒ハぎて、單衣の袖卷込めつゝ、兩刀を挿したる儘に、水中へ跳り入り、抜手を切つて、酒サケぎ着かんと早れども、流烈しく波高ければ、行徳わたりの塩濱シホに成長チカりたる水練も、遂に追ひ着くことを得ず、いとも難義に及びし折から、物幾苞フクロか積登したる大平駄の船一艘千住のかたより漕カウ來れり。小文吾は、辛ツくして件の船の舷ヘに手をうち掛けて乗移れば、兩三箇の舟子共、駭オドロき騒ウぎて諸聲シヤウふり

立、この竊盜奴が、朝働アサきに米物せんと歎ウ不敵フテツさよ、打や括カれと罵りて、左右齊ヒトシ一撃ヒツたんとすると、小文吾はやく身を翻フして、兩三四竿フタツツヨツ、彼此へ追遠オシしたる舳ウラ櫃ケの正中ナカ、諸手に握カみて、振カち倒し、曳ヒ聲ヒかけて奪ウひ取る、楯タテ眞額マコに振り揚げて、撃ウち拗カんと疾視ヒヤへたる腕ウデに携カる一箇ヒトツの舟長フナチヤウ、慌ワてたる聲コエ戦ウはして、やよ喃古那屋ナンコナヤの令郎公レイラウキミ、且ナく怒イを鎮シめ給へど、勘解カンゲつゝ、只管禁めけり、この人は誰ぞ、其は下回ゲワに解分トクるを見て知らん。

- (ろ) 脚本、演劇の臺詞、舞臺の模様等を記したるものを脚本といふ。前時代の狂言記と頗る相似たるものなり。元祿の頃より漸く行はれしが、寛延、寶曆の頃より演劇の技大に進むにつれて、津打治兵衛、堀越菜陽、櫻田治助、鶴屋南北、並木五瓶等の作者、相ついで輩出し、作るところ極めて多きがなかに、南北が四谷怪談、五瓶が金紋カネイ五山桐、五大力等も有名なり。すべてこれ等の脚本の妙は、其構造の變幻極まりなきに在るが故に、簡短なる例を以て其巧を示し難し。
- (は) 俳文、狂文、皆滑稽諷諷を以て成れる小品文にして、俳文は多



く俳諧師の手に成り、狂文は多く戯作者、狂歌師等の作るどころ、後者は前者よりも野卑なるを常とす。

俳文は、芭蕉、支考、許六等、元祿の俳人にこれを能くするもの多くは、やく風俗文選等の書あれど、其最も見るべきは、寶曆頃の横井也有が鶉衣なり。也有は名を孫左衛門といふ、尾張の士なり。其文輕妙自在、滑稽を恣にして、たゞて卑俗に陥らず、蓋し滑稽文の上乗なるものなり。也有又俳諧を能くして、美濃風の名人と稱せらる。

狂文には、風來山人の六々部集最も著はる。風來は姓名を平賀源内といひ、又福内鬼外と號す。明和頃の人にして、奇才を抱きて用ゐられず、狂文、狂歌を假りて、其積憤を洩らしぬ。故に其文は、嘲世罵俗の氣に富めども、其詞藻の野卑なることは、一九三馬と伯仲の間にて在り。其滑稽の才、亦これが上に出不ず。其他、蜀山人、橘千蔭等も狂文に



欠

MISSING



明治三十一年十月一日印刷  
明治三十一年十月五日發行

日本文學史要典附

定價金五拾錢

著者 佐々政一

仙臺市東三番町六十九番地

發行者 山縣悌三郎

東京府北豐島郡巢鴨町大字上駒込村  
拾八及拾九番地

印刷者 中西美重藏

東京麹町區內幸町一丁目五番地

印刷所 ジヤパン、タイムス社

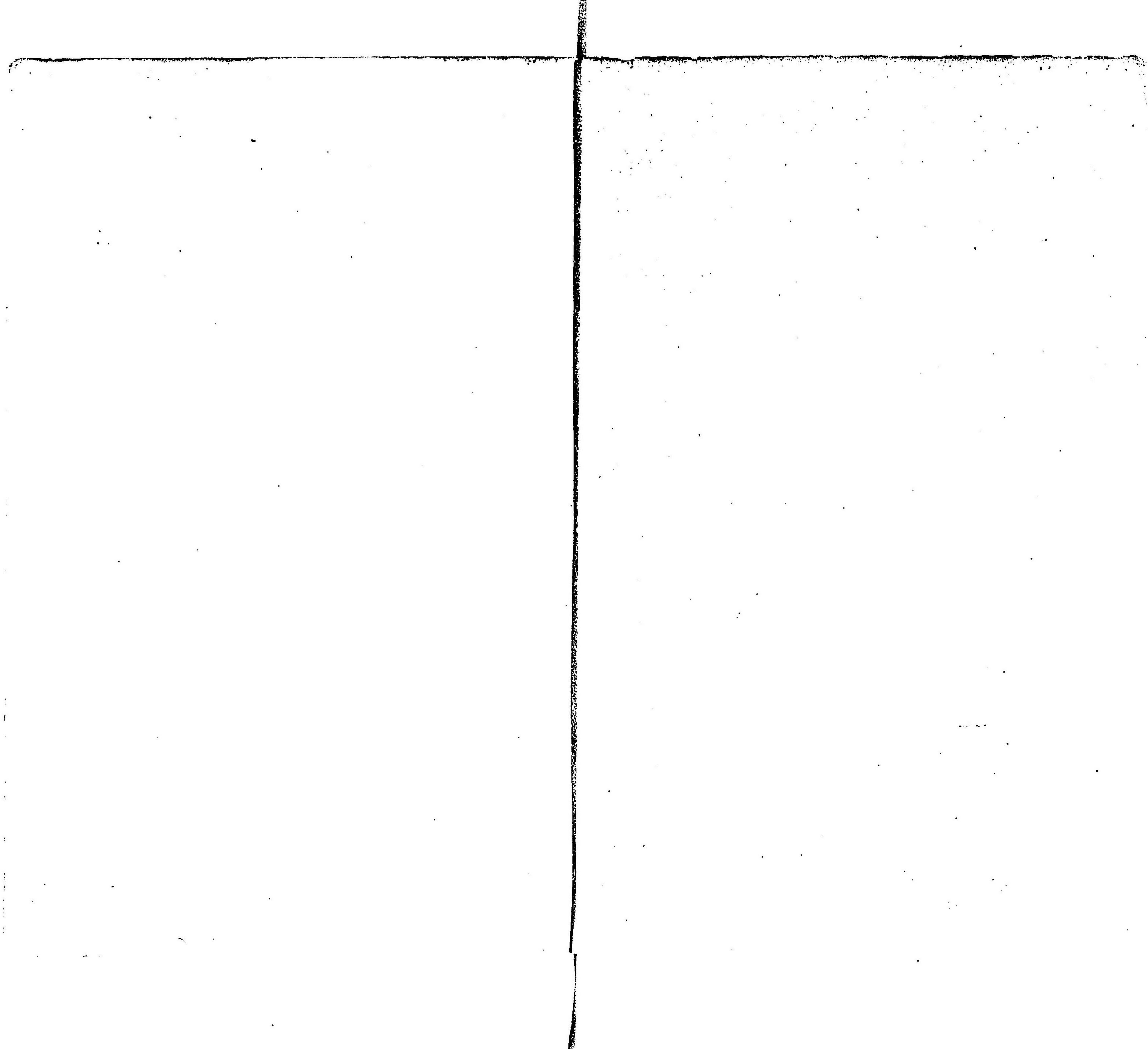
東京麹町區內幸町一丁目五番地

發行所 內外出版協會

東京市神田區南甲賀町八番地



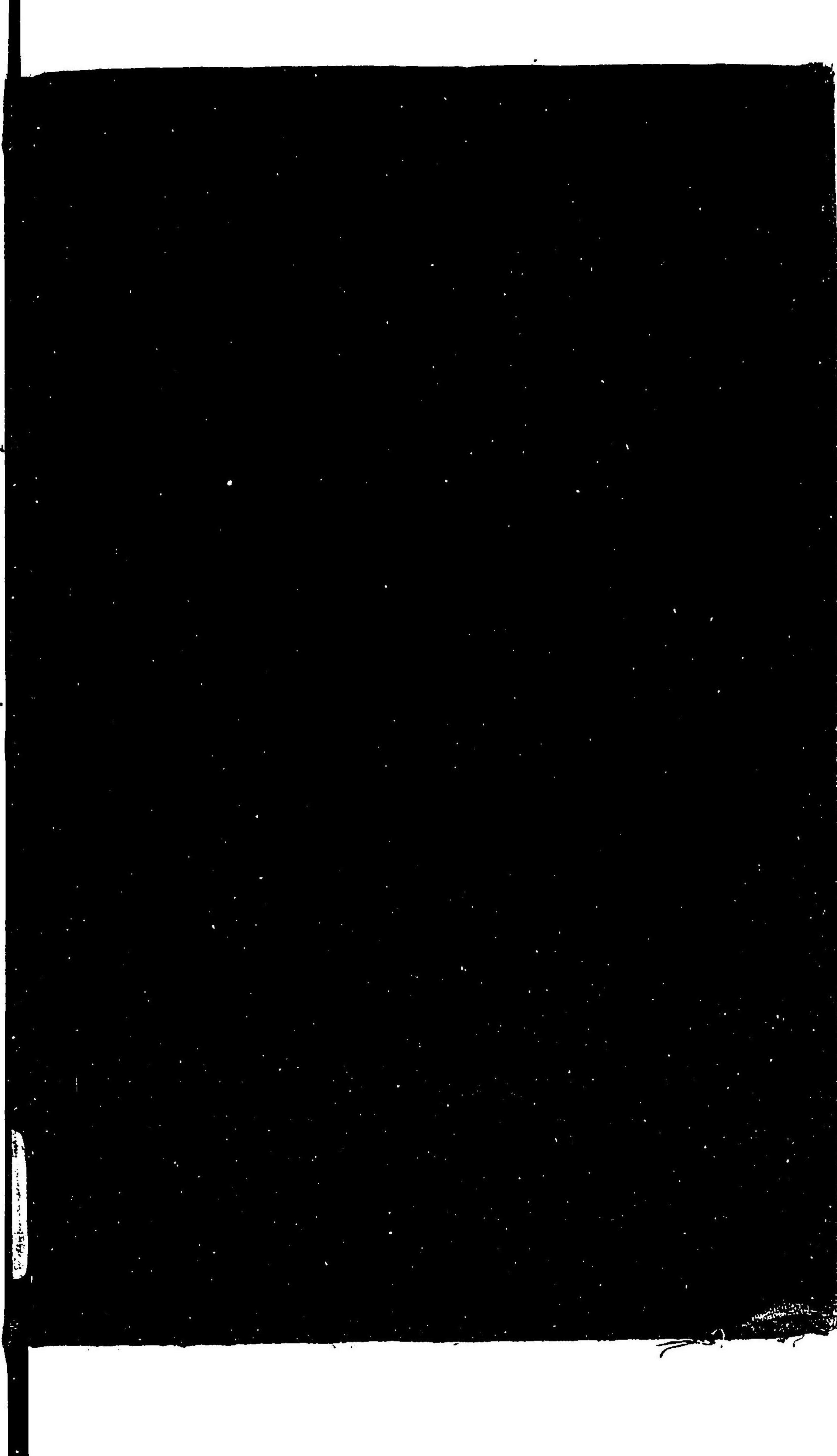






79
188







79  
188

084966-000-6

79-188

日本文学史要

佐々 政一/著

M31

DBB-0355





